

# 桜門体育学会

The Society for Physical Education, Health and Sport Sciences of Nihon University

## 平成26年度大会 (第5回大会) プログラム 発表抄録集

2015年1月25日(日)  
日本大学文理学部・百周年記念館



自主創造  
日本大学  
NIHON UNIVERSITY

---

## 目次

---

ごあいさつ (大会委員長 重城 哲) . . . . .	2
会場への案内 . . . . .	3
会場案内図 . . . . .	4
大会参加者へのご案内 . . . . .	5
一般発表 (ポスター) に関するご案内 (演者と座長) . . . . .	6
タイムテーブル . . . . .	7
一般発表の演者とタイトル . . . . .	8
抄録集	
特別講演要旨 . . . . .	17
シンポジウム要旨 . . . . .	18
一般発表抄録 . . . . .	21

---

## ごあいさつ

---

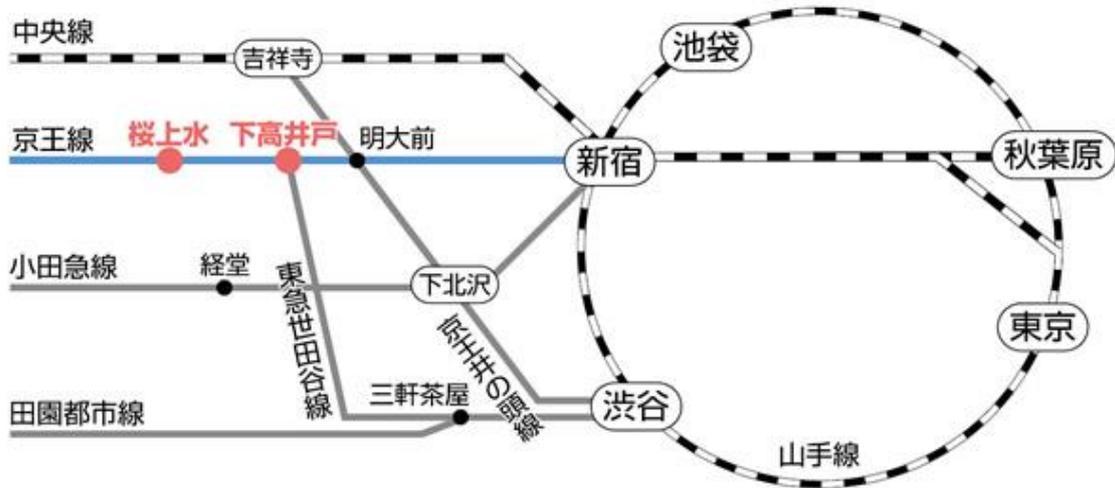
向寒の候、会員の皆様におかれましてはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、リニューアル後の桜門体育学会大会も本年度で第 5 回目を迎えます。今回は特別講演に松田悠介氏（NPO 法人「Teach For Japan」代表）を招いて、「時代を切り開く次世代の指導者達へ」のテーマで講演していただきます。また、シンポジウムでは「スポーツによる社会貢献の可能性を探る」をテーマとし、佐藤国正氏（桐蔭横浜大学）、田中宏明氏（NPO 法人「セブンスピリット」代表）、渋谷崇行氏（桐蔭横浜大学）にそれぞれ社会貢献活動に対する参加者、実践者、研究者としての異なった立場から話題を提供していただくと共に、特別講演の松田悠介氏にも、コメンテーターとして参加していただきます。

文字通り、時代を切り開く若手の指導者や研究者を中心に据えたテーマとなっていますので、特に大学院生や体育学科生（準会員）には積極的に討論に参加していただきたいと考えています。併せて、本大会が会員の皆さんの交流を深め、日本大学の健康・スポーツ科学の発展に一致団結して邁進する契機になることを願っております。

平成 26 年度大会実行委員会委員長 重城 哲

## 会場への案内



### 桜上水あるいは下高井戸へのアクセス

京王線新宿駅から桜上水駅あるいは下高井戸駅まで約 12 分（料金：160 円）

※下高井戸駅下車の方は快速あるいは各駅停車をご利用ください



学会会場（百周年記念館）

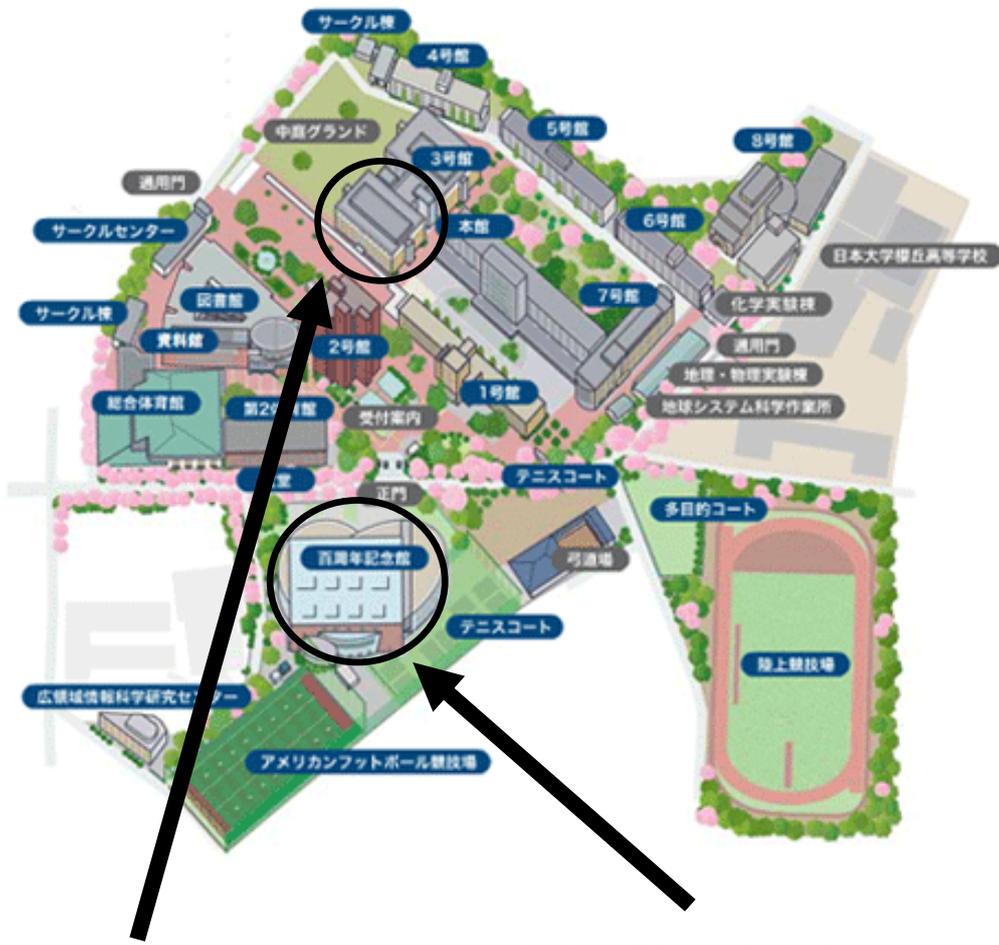
京王線桜上水駅あるいは下高井戸駅より徒歩 8 分

---

## 会場案内図

---

### 文理学部キャンパスマップ



懇親会会場の「秋桜」

(3号館1階)

学会会場 (百周年記念館)

---

## 大会参加者へのご案内

---

### 大会受付

- ・受付は1月25日(日曜日)9:00より、日本大学文理学部百周年記念館2階の国際会議場前で行います。
- ・受付時に配布されるネームカードは紛失しないようご注意ください。
- ・懇親会の受付を行いますので、参加を希望される方は当日受付にて懇親会費(2,000円)をお支払い下さい(学生は1,000円です)。
- ・大会参加費は会員、非会員共に3,000円となります(準会員の体育学科学生は無料です)。大会参加者と発表者の方が大会当日、受付にてお支払い下さい。共同研究者であっても、大会に参加されない方は不要です。
- ・大会参加は当日も受け付けます。事前に大会参加申し込みされていない先生は、受付にて大会参加手続きをお願い致します。
- ・シンポジウムと特別講演は一般公開です。

### 学会会場

- ・会場は日本大学文理学部百周年記念館の多目的ホール(1階)、国際会議場(2階)、会議室1~4(2階)となります。
- ・クロークは会議室3、控室は会議室4となります。
- ・特別講演とシンポジウムの打ち合わせ等は会議室1をご利用下さい。
- ・懇親会は3号館1階カフェテリア「秋桜」となります。
- ・理事会を11:30~12:30に会議室2にて行いますので、理事の先生方はご出席下さい。
- ・建物内は全面禁煙となっております。喫煙は建物外の指定された場所(正面玄関を出て左側)をお願い致します。

### その他

- ・当日は日曜日のため、学内の食堂は全て閉店しております。御手数ですが、昼食は桜上水や下高井戸のレストラン等をご利用下さい。
- ・ご不明な点は大会運営委員のネームカードを付けたスタッフまで、お気軽にお尋ね下さい。

---

## 一般発表（ポスター）に関するご案内（演者と座長）

---

### ポスターの作成にあたって

- ・ポスターの大きさは縦140cm，横90cmで作成して下さい。2m先からでも十分にみえる図表，文字を使用して下さい。
- ・演題名，発表者名，共同発表者名，所属を明示して下さい。

### 受付と発表

- ・掲示用のピンは大会受付でお受け取り下さい。
- ・一般発表開始時間の30分前（9:30）までに該当する演題番号のパネルにポスターを掲示して下さい。なお，ポスターは9:00から掲示することができますので，できるだけ早めに掲示して下さい。
- ・ポスターを4ブロックの研究領域に分け10:00より，演題番号P-A1，P-B1，P-C1，P-D1から順次，3分のプレゼンテーションを行います。発表者の方は各ブロックの座長の指示に従って，プレゼンテーションを行って下さい。
- ・質疑応答はすべてのプレゼンテーション終了後にそれぞれのポスター前で行いますので，発表者の方はプレゼンテーション終了後も，11:30まで在席して下さい。
- ・ポスターの撤収は発表時間終了後，速やかに行ってください。総会終了時間（17:00）以降は強制的に撤収させていただく場合があります。

---

## タイムテーブル

---

### 【1月25日（日曜日）】

9:00 受付開始：日本大学文理学部百周年記念館2階：国際会議場前

10:00～11:30 一般発表（ポスター）：多目的ホール

座長：加藤幸真（日本大学大学院地理学専攻），吉田明子（日本大学文理学部）

深見将志（日本体育大学大学院体育科学研究科）

伊佐野龍司（日本大学文理学部）

11:30～12:30 理事会：会議室2

13:00～14:00 特別講演

「時代を切り開く次世代の指導者たちへ」

講師：松田悠介氏

（NPO 法人 Teach for Japan 代表）

14:00～14:15 休憩

14:15～16:15 学会企画シンポジウム

「スポーツによる社会貢献の可能性を探る」

司会：磯貝浩久先生（九州工業大学大学院情報工学研究院）

シンポジスト：

1）佐藤国正氏（桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部）

2）田中宏明氏（NPO 法人セブンスピリット）

3）渋谷崇行氏（桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部）

コメンテーター：松田悠介氏（NPO 法人 Teach for Japan 代表）

16:30～17:00 総会：国際会議場

17:00～17:15 休憩

17:15～18:30 懇親会（3号館1階カフェテリア「秋桜」）

---

## 一般発表の演者とタイトル

---

### 一般発表 A

座長：加藤 幸真（日本大学大学院地理学専攻）

#### P-A1. 新制大学の発足と体育学

- 中田賢一（平成国際大学），西原康行（新潟医療福祉大学）  
加藤秀治（日本大学経済学部），中村達也（武蔵丘短期大学）  
吉岡康典（中部大学），堀込智也（日本大学文理学部体育学科）  
羽田積男（日本大学文理学部），村上幸史（日本大学文理学部）  
澤村博（日本大学文理学部）

#### P-A2. 米国占領下の武道政策について

- 近藤克之（日本大学経済学部），村上幸史（日本大学文理学部）  
堀込智也（日本大学文理学部体育学科），加藤幸真（日本大学大学院地理学専攻）  
加藤秀治（日本大学経済学部），澤村博（日本大学文理学部）

#### P-A3. 占領下におけるレクリエーション活動

- 堀込智也（日本大学文理学部体育学科），村上幸史（日本大学文理学部）  
近藤克之（日本大学経済学部），加藤幸真（日本大学大学院地理学専攻）  
加藤秀治（日本大学経済学部），澤村博（日本大学文理学部）

#### P-A4. 片足義足者における主観的努力度の変化が疾走動作に与える影響

- 青山晴香，菅谷慶太，田仲航，中島智広（日本大学文理学部体育学科）  
犬伏拓巳，今田直弥，多久優麗花，  
宮内育大，小林靖典（日本大学大学院教育学専攻）  
青山清英（日本大学文理学部）

#### P-A5. 全身振動刺激がドロップジャンプの筋疲労の回復に与える影響

- 浅妻幹晴，前川翔（日本大学文理学部体育学科）  
宮内育大，今田直弥，多久優麗花，  
犬伏拓巳，小林靖典（日本大学大学院教育学専攻）  
青山清英（日本大学文理学部）

#### P-A6. 学生投てき種目の試合展開に関するトレーニング科学的考察 —試合論的視点から—

- 齋藤文孝（日本大学文理学部体育学科）  
犬伏拓巳，今田直弥，多久優麗花，  
宮内育大，小林靖典（日本大学大学院教育学専攻）

**P-A7. バスケットボールのフリースローにおけるプレパフォーマンスルーティンの効果**

○小岩瑤（日本大学大学院教育学専攻），高橋正則（日本大学文理学部）

**P-A8. フェンシング競技選手の視覚探索方略に関する研究**

ーフルーレ種目の選手を対象としてー

○松岡慧（日本大学大学院教育学専攻），高橋正則（日本大学文理学部）

**P-A9. スポーツ行動に対する親の支援行動**

○山下理恵（日本大学文理学部体育学科），高橋正則（日本大学文理学部）

**P-A10. 試合中における指導者の言葉がけが選手のモチベーションに与える影響**

ー大学女子ラクロス選手を対象としてー

○富岡亜祐美，星野七菜（日本大学文理学部体育学科），  
水落文夫（体育学科文理学部）

**P-A11. バスケットボール選手に対するプレー映像の提供がモチベーションに与える影響**

○鈴木大夢，下村浩生，赤堀育恵（日本大学文理学部体育学科）  
水落文夫（日本大学文理学部）

**P-A12. モチベーションビデオが大学柔道部員に与える心理的影響**

○白崎太一（日本大学文理学部体育学科），水落文夫（日本大学文理学部）

**P-A13. レスリング選手におけるモチベーションビデオの介入効果**

○河原崎諒（日本大学文理学部体育学科），水落文夫（日本大学文理学部）

## 一般発表 B

座長：吉田 明子（日本大学文理学部）

**P-B1. ブラインドサッカー日本選手権におけるシュート角度および距離からみた攻撃スタイルについての基礎的分析**

- 泉健也（日本大学文理学部体育学科），橋口泰一（日本大学松戸歯学部）  
大嶽真人（日本大学文理学部），坂本宗司（日本大学文理学部）  
伊佐野龍司（日本大学文理学部），菅野慎太郎（日本大学大学院教育学専攻）  
松崎英吾（日本ブラインドサッカー協会）

**P-B2. サッカーにおけるペナルティーキックについて**

- 木村優介（日本大学文理学部体育学科），野口智博（日本大学文理学部）

**P-B3. サッカーにおけるドリブルスピードについて**

- 堀込拓哉（日本大学文理学部体育学科），野口智博（日本大学文理学部）

**P-B4. バasketボールにおける**

**ワンハンドシュートとツーハンドシュートに関する意識調査**

- 小松葉菜（日本大学文理学部体育学科），野口智博（日本大学文理学部）

**P-B5. バントによる得点率について**

- 金子紀新（日本大学文理学部），野口智博（日本大学文理学部）

**P-B6. 軟式野球における主観的速度と客観的速度の違いについて**

- 菊池晃一（日本大学文理学部体育学科），野口智博（日本大学文理学部）

**P-B7. 野球における睡眠とパフォーマンスとの関係性**

- 林達也（日本大学文理学部体育学科），野口智博（日本大学文理学部）

**P-B8. 野球の打者におけるルーティンの捉え方について**

- 川部太佑（日本大学文理学部体育学科），野口智博（日本大学文理学部）

**P-B9. プロ野球各球団ファンのファン心理応援行動および集団所属意識の違いについて**

- 石黒達也（日本大学文理学部体育学科），野口智博（日本大学文理学部）

**P-B10. サークルレベルでのバレーボール競技者の障害と競技復帰**

- 大野準司（日本大学文理学部体育学科），野口智博（日本大学文理学部）

**P-B11. ウェイトリフティング競技者における障害の系統性について**

○戸松大（日本大学文理学部体育学科），野口智博（日本大学文理学部）

**P-B12. 肩関節脱臼の治療，再脱臼の予防**

○中川怜（日本大学文理学部体育学科），野口智博（日本大学文理学部）

**P-B13. 喫煙とスポーツの関係性**

○仁科俊一（日本大学文理学部体育学科），野口智博（日本大学文理学部）

## 一般発表 C

座長：深見 将志（日本体育大学大学院体育科学研究科）

**P-C1. 視覚・聴覚刺激を伴った呼吸法の心理生理的な反応**

○深見将志（日本体育大学大学院）

**P-C2. 大学生スポーツ集団における上下関係ストレスモデルの構築**

○義本大友（日本大学大学院教育学専攻），水落文夫（日本大学文理学部）

**P-C3. 体操競技選手に対するストレス刺激負荷と教示による意識調整が  
演技パフォーマンスに及ぼす影響**

○小野耀介，高桑哲詩（日本大学文理学部体育学科），水落文夫（日本大学文理学部）

**P-C4. 大学スポーツ選手のスポーツ集団における対人関係による心理的ストレスについて**

○阿部田早紀，笠本瞳，佐原まい（日本大学文理学部体育学科）  
水落文夫（日本大学文理学部）

**P-C5. バドミントンにおけるゲーム終盤時に抱く心理的ストレスと競技レベルとの関係性**

○金子泰志（日本大学文理学部体育学科），水落文夫（日本大学文理学部）

**P-C6. イメージリハーサルがトライアスロンのレースに及ぼす影響**

○福永晃樹裕（日本大学文理学部体育学科），水落文夫（日本大学文理学部）

**P-C7. 個人種目選手の外的・内的イメージの想起がスポーツ技術獲得に及ぼす影響**

○都築昂也，久保潤一郎（日本大学文理学部体育学科）  
水落文夫（日本大学文理学部）

**P-C8. 男子体操選手の熟達志向性による目標設定がパフォーマンスに及ぼす影響**

○小林亮介（日本大学文理学部体育学科），水落文夫（日本大学文理学部）

**P-C9. メンタルトレーニングによって高校野球選手の心理状態は  
どのように変化していくのか**

○猿谷信人（日本大学文理学部体育学科），水落文夫（日本大学文理学部）

**P-C10. 運動部活動が社会的スキルに及ぼす影響**

○伊与久剛，荒川文哉，田口和磨（日本大学文理学部体育学科）  
水落文夫（日本大学文理学部）

**P-C11. ソフトボールチームのチームビルディングを用いたトレーニングによる  
チームメンバーのコミュニケーションスキル向上効果**

○麻田健太郎（日本大学文理学部体育学科），水落文夫（日本大学文理学部）

**P-C12. ブレイクダンスにおけるウィンドミル習得の必須事項について**

○清水陽平（日本大学大学文理学部体育学科），野口智博（日本大学文理学部）

**P-C13. スポーツ活動時に聴く音楽の趣向性に関する調査**

—本学体育学科学生を対象として—

○伊藤希（日本大学文理学部体育学科），野口智博（日本大学文理学部）

## 一般発表 D

座長：伊佐野 龍司（日本大学文理学部）

**P-D1. ソフトテニス競技における自信とその資源との関係**

－競技歴および競技経験年数に着目して－

○佐久間智央（九州工業大学大学院），磯貝浩久（九州工業大学）

**P-D2. 野球選手の競技年数と特性的自己効力感の関係**

○岩下博樹（日本大学文理学部体育学科），水落文夫（日本大学文理学部）

**P-D3. 体操競技選手の失敗予防の対処に対する自信と競技力の関係について**

○島田恭平（日本大学文理学部体育学科），水落文夫（日本大学文理学部）

**P-D4. ラグビーレフリーにおけるレフリング実践知に関する質的分析**

○日紫喜熙士（日本大学大学院教育学専攻），水落文夫（日本大学文理学部）

**P-D5. イップスと書癢の関連性**

○市川あやめ，向後波香（日本大学文理学部体育学科）

水落文夫（日本大学文理学部）

**P-D6. “附締太鼓”におけるテンポの変化による感情変化についての研究**

○平野尚輝（日本大学大学院教育学専攻），水落文夫（日本大学文理学部）

**P-D7. サッカーの競技中の1点における重みについて**

－競技者の心理状態に与える影響に着目して－

○子安博史（日本大学文理学部体育学科），水落文夫（日本大学文理学部）

**P-D8. 実力発揮に関する練習型選手と本番型選手のパーソナリティの違い**

○長野礼和，山口武蔵（日本大学文理学部体育学科），水落文夫（日本大学文理学部）

**P-D9. 強度の異なる運動前後の気分変化について**

○小島秀斗（日本大学文理学部体育学科），水落文夫（日本大学文理学部）

**P-D10. 陸上競技投擲種目における最適パフォーマンス発揮に影響する心理状態**

○若月優士，大沼匠，三島優祐（日本大学文理学部体育学科）

水落文夫（日本大学文理学部）

**P-D11. 試合直前における指導者の言葉がけとその背景要因が**

スポーツ選手の動機づけに及ぼす影響

○菅野慎太郎（日本大学大学院教育学専攻），水落文夫（日本大学文理学部）

**P-D12. 継続的運動の開始のきっかけと継続する理由の年代比較**

○森本亜珠沙，田代ふうか（日本大学文理学部体育学科）

水落文夫（日本大学文理学部）

**P-D13. 中学生の劣等感と目標志向性が体育授業の参加動機に及ぼす影響**

○高橋瑞穂，小谷野芽衣（日本大学文理学部体育学科）

水落文夫（日本大学文理学部）

# 抄録集

---

## 特別講演要旨

---

### 時代を切り開く次世代の指導者たちへ

NPO 法人 Teach for Japan 代表  
松田 悠介



Teach For Japan は、日本における教育機会の不平等を是正し、次世代を生きる子どもたちに求められる優れた教育と学びを実現することを目的として活動する教育系 NPO。教育人材紹介事業と学習支援事業の 2 事業を運営する。教育人材紹介事業「Next Teacher Program」では、日本全国から次世代のリーダーとなる人材を選抜・育成し、全国の学校に教師として紹介することを通して、教育現場の内側から日本の教育課題の解決を推進する。

紹介された教師は「Teach For Japan フェロー」として、赴任前の合宿型研修と 2 年間の研修等の支援を受ける。2 年間のフェロー期間終了後は、当事者意識を持ち、教育現場において深めた課題認識と課題に取り組む中で習得したリーダーシップスキルを活かして、学校現場の内外において「社会が一丸となって教育課題の解決に取り組む文化」を創造する。2015 年より特別免許状の活用を通して、教員免許を持っていない人材が現場に取り組むという活動も始める。同時に慶応大学と連携し、プログラムの効果測定を展開し、エビデンスに基づいた教育実践の蓄積し、これからの時代に求められる教員採用/養成の在り方を追及する。現在代表の松田は奈良市教育振興戦略会議の委員も務めており、政策提言をスタートさせている。

2014 年、現在世界 36 のパートナー国が参加する Teach For All ネットワークに加盟し、世界のグッドプラクティスを共有しながら問題解決に取り組む。

本講演では、これからの時代に求められる教員の資質について皆様と議論し、明日からの行動に生かせるようにしていきたい。

#### ●プロフィール：

日本大学を卒業後、体育教師として中学校に勤務。体育を英語で教える Sports English のカリキュラムを立案。その後、千葉縣市川市教育委員会 教育政策課分析官を経て、ハーバード教育大学院（教育リーダーシップ専攻）へ進学し、修士号を取得。卒業後、PwC Japan にて人材戦略に従事し、2010 年 7 月に退職。Teach For Japan の創設代表者として現在に至る。日経ビジネス「今年の主役 100 人」（2014 年）に選出。世界経済会議（ダボス会議）Global Shapers Community 選出。経済産業省「キャリア教育の内容の充実と普及に関する調査委員会」委員。奈良県奈良市「奈良市総合計画審議会」委員、「奈良市教育振興戦略会議」委員。共愛学園前橋国際大学「グローバル人材育成推進事業」外部評価委員。京都大学特任准教授。

---

## シンポジウム要旨

---

### スポーツによる社会貢献の可能性を探る

司会：磯貝浩久

スポーツによる社会貢献は様々なかたちで行われている。スポーツが有する資源をいかに効果的に用いて社会貢献に繋げていくかという視点は、今後ますます重要視されるであろう。このシンポジウムでは、社会貢献の中でも特に国際協力に焦点を当てて、スポーツが有する可能性について考えてみたい。

スポーツによる国際協力は教育、文化交流、貧困対策、平和等、様々なキーワードの下で実施されてきた。こうした事実からいえることは、スポーツには国際協力に貢献しうる何らかの力があると認められてきたということである。それでは、国際協力に貢献しうるようなスポーツが有する資源とは何であろうか。この問いに答えることは、国際協力の観点からスポーツの意義を検討することでもある。そして、そこから導かれた資源を意図的に実践に応用することによって、スポーツによる国際協力はより効果的に行われるようになるであろう。

一方、体育・スポーツ系の学部で学ぶ学生に目を転じてみると、彼らが専門職として働ける場は、現状では教員や民間スポーツクラブのインストラクターなどに限られてきた。このことから、体育・スポーツ系学部における専門職養成も、そのような職種を意識して行われることが多かったといえる。しかし、国際協力に果たすスポーツの役割が明確になり、その広がり在今后ますます期待されるのであれば、体育やスポーツの専門家がその分野で活躍することも求められるようになる。それでは、スポーツによる国際協力の実践者に備わるべき能力や資質とはどのようなものなのか。それに準じて、体育・スポーツ系学部における教育内容に変化が生じたり新たなものが加わったりする可能性もある。

さらに、我々研究者が、スポーツによる国際協力にどのように貢献できるのかということについても考えたい。スポーツによる国際協力が効果的に行われるようになるためにはどのような研究が求められるのか。国際協力において、実践に役立つ知識への需要は大きいことが予想される。したがって、我々研究者には実践に役立つ研究を進めていくことがますます求められそうである。

以上のような関心から、本シンポジウムでは、主に次の3点について検討したい。そして、その議論を通して、スポーツによる国際協力の可能性や今後の課題を導きたいと考えている。

- 1) スポーツが行うことができる国際協力とはどのようなものか、またスポーツには国際協力に貢献しうるどのような資源があるのか。
- 2) スポーツによる国際協力を推進するうえで、その実践者に求められる能力や資質とは

どのようなものか。また、専門職養成という点からは、どのような学習や経験が求められるのか。

- 3) スポーツによる国際協力に対して、我々研究者はどのような貢献ができるのか。また、期待される研究テーマとしてどのようなものが考えられるのか。



### スポーツに秘められたチカラ

シンポジスト：佐藤国正

桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部

国際協力に貢献し得るスポーツの資源について「スポーツに秘められたチカラ」をテーマに掲げ、青年海外協力隊の経験者の立場から開発途上国でのスポーツの意義や価値について発表する。スポーツには多くの人を惹きつけ、魅了するチカラがある。こうしたスポーツの利点を有効活用する動きが国内外のあらゆる分野で起こっている。なかでも、国際協力分野では、開発途上国の人づくり、国づくりの為に、スポーツをひとつのファクターとして積極的に取り入れている傾向にある。

我が国における政府開発援助（ODA）を一元的に行う実施機関として開発途上国への国際協力を行なっている JICA では、早期からスポーツの有効性を唱え、長きに亘って実践してきた。教育水準が低いとされる開発途上国では、家庭環境の差異によって青少年の知・徳・体にアンバランスが散見される。青少年を対象としたスポーツ活動では、競技種目のルールやチームの規律に尊厳を抱くことによって養われるモラルへの理解、チームワークを通じて学ぶ協調性への配慮と他者理解、競技力の向上のため計画的にトレーニングに励む継続性の重要性など、実践を通じた情操の教育を可能にしている。スポーツ活動は、心や身体、価値観や世界観、さらに社会を変革させる可能性を秘めている。



### 未来を創る子ども教室

シンポジスト：田中宏明

NPO 法人セブンスピリット

スポーツが国際協力にいかにかに寄与できるかについて、フィリピンのセブ島で子ども達にスポーツ教育を実践している立場から、経験談を交えてスポーツ教育の有効性を発表する。開発途上国における学校教育、特にスポーツ教育の貧弱さを痛感して弊団体を設立したわけだが、これまでスポーツに触れてこなかった子ども達にスポーツ教育を通して目覚ましい成長を遂げて

いるのを目の当たりにして、あらためてスポーツの持つ力、そしてスポーツが幼少期における人格形成に非常に効果的であることを感じている。

身体的な成長に効果があるのはもちろんだが、特に効果をもたらすのが精神面である。フィリピンのセブ島では実に 20%近くが貧困層であり、弊団体に通う子ども達の大半はスラムに暮らす、いわゆる貧困地域の子も達である。スラム地域にはモラルやルールといった概念が乏しく、10 歳程度の子も達でも喫煙はもちろんシンナーをはじめとするドラッグに安易に手を出す傾向にあるが、スポーツに打ち込む子も達はそういった誘惑に打ち勝ち、ドラッグに手を出す子も達とは意識にはっきりとした違いが見て取れる。チームスポーツを通して協調性や他者理解、コミュニケーション能力といった、生きていく上で必要なライフスキルを育成する。すなわち、子どもの未来を創る力が、スポーツにはある。



### 「スポーツによる国際協力」における研究の役割

シンポジスト：渋谷 崇行

桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部

「スポーツによる国際協力」は様々な形で行われている。それらは取り組む問題や課題のタイプ、あるいは活動組織の大きさ等によって差はあるものの、スポーツが有する資源を当該国の問題や課題の解決に適用していくという基本的な考え方は共通している。しかし、その国にスポーツを持ち込みさえすれば、問題や課題が直ちに解決に向かうというわけではない。問題や課題の性質とともに、それらに貢献しうるスポーツの特性を的確に理解することで、「スポーツによる国際協力」は効果的に行われるようになるといえる。そして、こうした理解を促すための知識を生み出すことが、研究には求められている。

ところで、研究の成果を現場の実践に役立たせたいと考える研究者は多い。しかし、実践の現場からは、研究が役立っていないとの声が聞こえてくることもある。具体的には、実践現場で必要とされる研究が行われていないということや、研究成果が実践で活かせるかたちになっていないという批判がある。ここで「スポーツによる国際協力」における研究の役割に目を転じてみると、当然のことながら、実践に役立つ知識への需要は大きい。そこで、本シンポジウムでは、「どのようにすれば現場の実践に役立つ研究を行うことができるのか」という問いに対する演者なりの考えを、理論と実践、そして研究者と実践者との関係性の観点から論じてみたい。

# 一般発表抄録

## P-A1

### 新制大学の発足と体育学

- 中田賢一（平成国際大学），西原康行（新潟医療福祉大学），  
加藤秀治（日本大学経済学部），中村達也（武蔵丘短期大学）  
吉岡康典（中部大学），堀込智也（日本大学文理学部体育学科），  
羽田積男（日本大学文理学部），村上幸史（日本大学文理学部），  
澤村博（日本大学文理学部）

キーワード：体育学部，大学体育，保健体育科目

本研究は，新制大学の発足と同時に学部組織として体育学部が 2 大学に発足した経緯，全ての大学に保健体育科目 4 単位が必修科目となった経緯，これら 2 つの経緯を併せて新制大学教育における体育学誕生の経緯を確認していく。

体育学部発足では，東京高等師範学校体育科と東京体育専門学校が東京教育大学体育学部に，日本体育専門学校が日本体育大学に昇格を果たした。国立 1，私立 1 のそれぞれの大学に視点を当て，新制大学発足時の体育学部が抱いた理念，教育内容を確認する。

保健体育科目必修化では，新制大学で必修科目とされた「保健体育科目 4 単位」の教育課程設置をめぐる経緯を確認していく。

専門教育としての体育学と，教養教育としての体育学の 2 つの発足経緯を確認することで，新制大学発足時の体育学を確認することができる。

## P-A2

### 米国占領下の武道政策について

- 近藤克之（日本大学経済学部），村上幸史（日本大学文理学部），  
堀込智也（日本大学文理学部体育学科），加藤幸真（日本大学大学院地理学専攻），  
加藤秀治（日本大学経済学部），澤村博（日本大学文理学部）

キーワード：大日本武徳会，軍国主義，民主化，超国家主義

本研究の目的は GHQ/SCAP はなぜ大日本武徳会を解散させたのか，更にその傘下の武道諸団体（柔道，弓道，剣道等）は組織再興のために GHQ/SCAP に対して如何に対処したか，この点について明らかにする。

GHQ/SCAP は日本帝国に対して教育基本政策と占領目的に関する四つの基本指令を 1945 年 10 月 22 日から同年 12 月 31 日に亘り矢継ぎ早に発令した。ここで述べた発令は大別して次の二つに分けられる。(1) 軍国主義と極端な国家主義の排除，(2) 民主化政策，であった。

GHQ/SCAP は日本の民主化を急いだ。日本の伝統的武道，特に剣道，柔道，剣道等は軍国主義者が軍国主義及び国家主義の手段として利用したもとして学校から放逐した。そればかりか，武道具も処分するよう求めた。かくして，大日本武徳会は 1946 年解散させられることとなった。

当時 GHQ/SCAP の下部組織 CIE には多くの大学生が押し掛け柔道，弓道等学内での活動を要望した。CIE のスタッフは彼らを快く迎え入れ，要望を聴き入れた。こうした行動は GHQ/SCAP 自身民主化の第一歩と考えていた。

## P-A3

### 占領下におけるレクリエーション活動

- 堀込智也（日本大学文理学部体育学科），村上幸史（日本大学文理学部）  
近藤克之（日本大学経済学部），加藤幸真（日本大学大学院地理学専攻）  
加藤秀治（日本大学経済学部），澤村博（日本大学文理学部）

キーワード：民主主義，スクエアダンス，軍国主義，超国家主義，武道

本研究は1945年8月15日から1952年4月28日までを占領下と位置づけ，その期間GHQ/SCAPによる間接統治を受けながら，日本のレクリエーション活動がどのように展開されたのかを明らかにすることを目的とする。

第二次世界大戦後間もなく日本政府は「新日本建設の教育方針」を発表したが，GHQ/SCAPは日本の自主的改革を認めず，新たに「四大教育指令」を発表した。この指令は日本を民主化するにあたり戦前の軍国主義と極端な国家主義を排除するためのものであり，軍国主義の象徴とされた武道，特に剣道の活動を厳しく制限した。戦時中5年間に渡り行われてきた体育教育の3分の2を占めていた教練と武道の廃止は，学校体育のみならず，レクリエーション活動として武道を行っていた社会人にも大きな影響を与えた。レクリエーション活動を実施していくうえで，レクリエーションということばをどのように普及させていくか，組織の再組織化，財源不足，実施施設や用具の不足等，問題は数多くあった。そのような中，1946年に長崎県教育担当官であったウィンフィールド・ニブロがスクエアダンスを取り上げたところ瞬く間に全国へ普及していった。急速に広がっていったことにより，レクリエーション活動は踊ることだと誤解されるほどであった。

## P-A4

### 片足義足者における主観的努力度の変化が疾走動作に与える影響

- 青山晴香，菅谷慶太，田仲航，中島智広（日本大学文理学部体育学科）  
犬伏拓巳，今田直弥，多久優麗花，宮内育大，小林靖典（日本大学大学院教育学専攻）  
青山清英（日本大学文理学部）

キーワード：疾走動作，主観的努力度，片脚大腿義足者，健常脚，1サイクル

本研究では，主観的努力度の変化が片脚大腿義足者の健常脚の疾走動作にどのような影響を与えるかを比較検討することを目的とした。被験者には日本身体障害者陸上競技連盟のクラス分けに基づき，T42：片大腿切断（膝関節離断含む）または片側下肢の膝関節と足関節の機能の全廃したものに該当する男性短距離選手2名を用いた。実験試技は，試合時の疾走と同じ主観的努力度を100%とし，スタンディングから60mまでの加速走を100%・80%・60%と変化させる試技を行った。その試技を，デジタルビデオカメラ6台を用いて健常脚側である被験者の右側方から毎秒60コマでパンニング撮影した。撮影によって得られた映像から，動作分析システム（Frame-DIAS IV for windows）を用いて身体各部23点および較正点4点の位置座標を読み取り，4点実長換算法により2次元座標値を求めた。各努力度の疾走動作における健常脚を分析対象とした。また，最高速度を満了した1サイクルを抜き出し接地・離地時間，重心高，体幹速度を算出し，疾走動作のメカニズムについて検討した。結果については，学会当日ポスターにて報告する。

## P-A5

### 全身振動刺激がドロップジャンプの筋疲労の回復に与える影響

○浅妻幹晴, 前川翔(日本大学文理学部体育学科),  
宮内育大, 今田直弥, 多久優麗花, 犬伏拓巳, 小林靖典(日本大学大学院教育学専攻)  
青山清英(日本大学文理学部)

キーワード: 全身振動刺激, 筋疲労の回復, ドロップジャンプ

本研究では, ドロップジャンプを用いて, 全身振動刺激が筋疲労回復に与える影響を検討することを目的とした。

被験者には, 体育学科に所属する男子学生 40 名とした。実験試技 I は, ①台高 40cm からの腕振りを用いたドロップジャンプ, ②Power Max(Power Max 社製)を用いて無酸素パワーを測定し, 筋を疲労させた。③1 分 30 秒の休息後, スクワットの姿勢で 30Hz low に設定した Power Plate Pro6(Power Plate 社製)を用いて, 全身振動刺激を 30 秒×3set(set 間は 30 秒)行った。そして, 1 分 30 秒の休息後, 再度ドロップジャンプを行った。実験試技 II は, ①, ②の試技を行い 6 分間の休息後, 再度ドロップジャンプを行った。

測定方法は, マットスイッチ(DKH 社製)を用いて, 接地時間と滞空時間を測定し, 跳躍高と DJindex を算出した。そして, 各測定項目について比較検討するために, 2 要因の分散分析を行った。なお, 有意水準は 5%とした。結果については, 学会当日にポスターにて発表する。

## P-A6

### 学生投てき種目の試合展開に関するトレーニング科学的考察 —試合論的視点から—

○齋藤文孝(日本大学文理学部体育学科),  
犬伏拓巳, 今田直弥, 多久優麗花, 宮内育大, 小林靖典(日本大学大学院教育学専攻)

キーワード: 戦術的思考, 試合展開, 投てき

陸上競技において, 試合の勝敗を決する方法の一つに戦術的思考がある。戦術的思考とは, その試合で設定する目標やそれに向けての取り組み方法のことを指す。このことから, 戦術的思考を高めることが試合で勝つために必要であると考えられている。しかし, このような試合展開に関する報告で, 投てきに関するものはあまり見られない。

そこで, 本研究では近年競技レベルを上げている学生投てき種目の過去 5 年間の関東, 全日本の両インターカレッジを対象に, 重要と考えられる項目(①各試合, 各順位の平均記録, ②ベスト記録が記録された試技の出現試技数, ③優勝と 3 位入賞が決定された試技数, ④ファウル試技の出現状況)について, 試合展開に関する分析を行った。結果については当日発表する。

## P-A7

### バスケットボールのフリースローにおける プレパフォーマンスルーティンの効果

○小岩瑤（日本大学大学院教育学専攻）、高橋正則（日本大学文理学部）

キーワード：バスケットボール、フリースロー、プレパフォーマンスルーティン

バスケットボール競技では、フリースロー前にドリブルをつく、手のひらでボールを回すなどのプレパフォーマンスルーティンを行ってシュートを打つという一連の行動がよく見られる。プレパフォーマンスルーティンは、プレーの前に一定の所作を実行することで、緊張場面でも自己の注意を乱すような動揺を防ぐことができる（遠藤，2005）ことから、熊崎（2010）の実験的研究によると、フリースローシュート前に、ドリブルとリングを見つめるといった行動が明らかとなっている。また、フリースロー成功率の高い選手は、リングに対する注視時間が長い（Vickers，1996）ことが報告されている。

そこで本研究では、プレパフォーマンスルーティンの効果について明らかにするため、バスケットボール経験者と未経験者の具体的なシュート前の行動を比較検討することとした。被験者は、大学生バスケットボール経験者と未経験者とし、経験者をシュート前のドリブル行動の有無別、未経験者をコントロール群とする3群に分類した。なお、実験の流れを記録するためにビデオカメラを2台設置し、試行中の注視行動を探るために眼球運動測定器を被験者に装着させ、フリースロー課題を実施した。また、フリースロー課題直後に二次元気分尺度と内省報告の記入を行った。主な結果は、当日発表する。

## P-A8

### フェンシング競技選手の視覚探索方略に関する研究 ーフルーレ種目の選手を対象としてー

○松岡慧（日本大学大学院教育学専攻）、高橋正則（日本大学文理学部）

キーワード：フェンシング、眼球運動、視覚探索、注視

本研究では、フェンシング競技における熟練者と未熟練者を対象とし、攻撃の基本動作である対戦相手のファント動作に対処する際の眼球運動を比較し、フェンシング競技に有効な視覚探索方略を検討することを目的とした。被験者は、フェンシング経験者14名とし、競技成績を参考に熟練者群（7人）と未熟練者群（7人）の2群に分類した。実験では、実際の試合で使用するピスト上で、試合を想定した対戦モデルがファント動作をしかけてくる際の被験者の眼球運動を計20試行測定した。また、実験後被験者から内省報告を得た。その結果、第2局面の注視時間、注視対象数、注視回数において2群間に有意な差が認められた。また、ファント動作における合計注視時間でも熟練者群に有意な差が認められた。熟練者群において第1、第3局面の局面別注視時間を比較したところ、第3局面において有意に高い値を示した。両群における局面別注視時間でも、第4局面に対して、第1、第2、第3局面において有意に高い値を示した。以上のことから、フェンシング競技に有効な視覚探索方略として、攻撃の準備期である第2、第3局面への視覚探索方略を重要視する可能性が示唆された。また、2群間比較から第2局面における注視活動がフェンシング競技において特に重要であると考えられる。

## P-A9

### スポーツ行動に対する親の支援行動

○山下理恵（日本大学文理学部体育学科），高橋正則（日本大学文理学部）

キーワード：支援行動，親，心理的競技能力，心理的競技能力診断検査

スポーツを行っている子どもにとって，親は大きな影響力を与える存在である（永井，2004）．親の支援行動にはポジティブな支援，ネガティブな支援，非支援行動があり，特にネガティブな支援は親が子どもに対して好ましい効果を期待して支援をしてもネガティブな影響を与えてしまう支援である（Antonucci, 1985）．本研究では，子どものスポーツ行動に対する親の支援行動や親の称賛・叱責の類型が子どもの競技力（競技成績と心理的競技能力）に対してどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的とした．調査対象は12種の運動部に所属している中学2年生の男女139名であり，親の支援を意味する行動についての質問71項目（赤尾，本村，1996）と心理的競技能力診断検査（DIPCA, 3），子どもからみた親の称賛・叱責の類型をとらえる質問（玉瀬，1983）について，質問紙法による調査を行った．これらの分析データをもとに，スポーツを行なう子どもを持つ親の支援行動や称賛・叱責の類型が子どもの競技力にどのような影響を及ぼすのか具体的に検討した．結果は，当日発表する．

## P-A10

### 試合中における指導者の言葉がけが 選手のモチベーションに与える影響 —大学女子ラクロス選手を対象として—

○富岡亜祐美，星野七菜（日本大学文理学部体育学科），水落文夫（体育学科文理学部）

キーワード：モチベーション，指導者，信頼性，ラクロス，言葉がけ

体育・スポーツにおける動機づけは，試合場面での実力発揮などと強い関係があると考えられている（最新スポーツ科学辞典，2006）．試合中の選手のモチベーションを高める要因の一つとして指導者からの言葉がけがあげられる（矢澤，2007）．本研究では指導者の叱責や称賛，励ましなど選手に対する言葉がけに着目した．そしてポジティブな内容とネガティブな内容のどちらがより選手のモチベーションを高めることに影響するのか，それがどんな言葉なのかを明らかにした．ただし，同じ言葉がけでも，その言葉がモチベーションの向上につながるかどうかは，その言葉を受け取る選手と受け取る状況によって異なると考えられる．例えば，同じ言葉がけでも選手と指導者の間の信頼性が高くなければ，選手に与えるモチベーション効果は低下すると考えられる．そこでまず，主に1，2部リーグに所属する大学ラクロス部員を対象に，指導者に対する信頼性を質問紙により評価した．そして，ポイントで劣勢にある試合中という状況を想定させ，指導者の言葉がけに対して選手のモチベーションに与える影響を質問紙により評価することで検証した．すなわち，指導者の言葉がけと選手の信頼感を独立変数とし，選手のモチベーションを従属変数として，3者の関係性を検討した．

## P-A11

### バスケットボール選手に対するプレー映像の提供がモチベーションに与える影響

○鈴木大夢, 下村浩生, 赤堀育恵 (日本大学文理学部体育学科)  
水落文夫 (日本大学文理学部)

キーワード: モチベーション, バスケットボール選手, ジャンプシュート, プレー映像

モチベーションを高めてパフォーマンスを向上させるために, 試合前に選手に対して映像を見せる方法が用いられている. 映像を視聴することによって, 心理的側面に良い影響を与え, パフォーマンス向上へとつながる (山崎・杉山, 2009). しかし, 映像で提供する選手の競技レベルが高すぎるとモチベーションおよびパフォーマンスはあまり向上しないのではないかと考えられる. 達成が難しい目標ではなく, 実現が可能でチャレンジする気持ちを刺激する目標を設定することによりパフォーマンスが向上する (Kyllo & Landors, 1995). したがって, 選手の競技レベルよりも少し高いレベルをモデルとした映像の提供が, モチベーションやパフォーマンスをより向上させると考えられる.

本研究では大学女子バスケットボール選手を対象として, プレー前に与えるプレー映像の競技レベルの違いによるモチベーションやパフォーマンスの変化について比較を行った. 映像は大学生選手およびプロ選手のバスケットボールの試合中におけるシュート場面を編集したものであった. 運動課題は 10 本のジャンプシュートであり「映像視聴なし」条件, 「プロ選手の映像」条件, 「大学生選手の映像」条件の 3 条件で実施した. そして, 実験前と 3 条件それぞれの試行前に競技意欲と自信に関する尺度を用いて選手の心理状態を評価した.

## P-A12

### モチベーションビデオが大学柔道部員に与える心理的影響

○白崎太一 (日本大学文理学部体育学科), 水落文夫 (日本大学文理学部)

キーワード: モチベーションビデオ, 柔道, 集団凝集性, 集団効力感

本研究では, 6 月に行われた全日本学生柔道優勝大会と 10 月に行われた全日本学生柔道体重別選手権大会の前日に N 大学柔道部に対してモチベーションビデオ作成し, モチベーションビデオを視聴することにより, チームの結束力を高めることができるのかについて検討することを目的とした. チームの結束力は集団凝集性尺度と集団効力感尺度という因子で測ることにした. 集団凝集性尺度とは阿江(1986)によって作成された尺度で, 一般には Festinger(1950)による「集団成員が集団に止まるように働きかける全体的な場の力」という定義が用いられている. また集団効力感とは Bandura(1986, 1997)によって提唱された概念であり, 「課題達成に必要とされる行動を系統立てて実行するための能力に対する集団で共有された信念」と定義されている. モチベーションビデオは, 試合前にやる気や自信を高めるために作成されるビデオであり, それまでの積み重ねてきた日々の練習や乗り越えてきた苦難を思い起こすことができる写真や試合などの成功映像, 選手のやる気や自信が高まる音楽と言葉を組み合わせて作成される. ビデオ視聴前後の因子得点の平均値を t 検定により検定した. その結果, どちらの日程も集団効力感尺度, 集団凝集性尺度のすべての因子において有意差が認められ視聴後に高まっていた.

## **P-A13**

### **レスリング選手におけるモチベーションビデオの介入効果**

○河原崎諒（日本大学文理学部体育学科），水落文夫（日本大学文理学部）

キーワード：self-modeling 理論，モチベーションビデオ，不安軽減，集団効力感

スポーツメンタルトレーニングや心理サポートにおいて，イメージや目標設定などの様々な心理技法が使用されている．その中で，映像技術の発展に伴い，映像を用いた動機づけを操作する方略への取り組みが行われている．モチベーションビデオ(以下 MV)もその1つである．そこで，団体戦を前日に控えた N 大学レスリング部の選手に MV による実践的介入を行うことで，選手が抱く試合前の不安を軽減させることができるかどうか明らかにした．そして，MV が選手の集団効力感，集団凝集性といった心理状態にどのような変化をもたらすかを検証した．調査方法は，試合前夜のミーティングで行った MV 前後に3種類の心理尺度（日本版スポーツ集団効力感，GEQ 日本語版，心理的コンディション診断検査 for MV）回答を求めた．さらに，試合直前に心理的コンディション診断検査 for MV への回答を求めた．これに対して，MV による介入を行わなかった試合では，MV を行わないことのみ異なり心理尺度は同様に行われた．収集したデータは二要因分散分析（MV 有無要因×ミーティング前後要因）により，集団効力感，集団凝集性，心理的コンディションの MV 有無とミーティング前後の変化について検証した．

## P-B1

### ブラインドサッカー日本選手権におけるシュート角度および距離からみた攻撃スタイルについての基礎的分析

○泉健也（日本大学文理学部体育学科）、橋口泰一（日本大学松戸歯学部）  
大嶽真人（日本大学文理学部）、坂本宗司（日本大学文理学部）  
伊佐野龍司（日本大学文理学部）菅野慎太郎（日本大学大学院教育学専攻）  
松崎英吾（日本ブラインドサッカー協会）

キーワード：視覚障がい、アダプテッドスポーツ、Football 5-a-side

ブラインドサッカーは、1980年代初頭にヨーロッパや南米を中心に国際ルールが統一化され行われ、パラリンピックにおいて2004年アテネ大会よりB1クラスが「Football 5-a-side」として正式種目となった。日本では2002年に日本視覚障害者サッカー協会が発足し関東・関西を中心に本格的に普及した。しかし、2008・2012年のパラリンピックに出場することがかなわなかったが、2016年リオ大会出場に向けて強化がなされている。

これまで視覚障害者のスポーツに関する研究は、リハビリテーションや運動の教授法についてなど様々な観点で行われてきているが、競技力向上を目的とした研究はあまりみられず、ブラインドサッカーの競技力向上を目的とした研究は少ない。今後日本が世界との差を縮めるためにも競技力向上に特化した科学的な研究およびサポートが急務であると言える。

そこで本研究は、日本選手権におけるシュートの角度と距離に着目し、国内における攻撃場面の基礎的な分析を通して、国内選手および代表選手の競技力向上の手がかりを見出すことを目的とした。

本研究は、JSPS 科研費(26350794 ならび 26350795)の助成を受けて行われました。ここに記して感謝申し上げます。

## P-B2

### サッカーにおけるペナルティーキックについて

○木村優介（日本大学文理学部体育学科）、野口智博（日本大学文理学部）

キーワード：サッカー、ペナルティーキック

サッカーでは、ペナルティーキック（PK）は勝敗を分ける非常に重要なプレーの一つである（太田、鈴木、2006年）。一見、テレビなどでハイレベルなチームのサッカーの試合を見ると、PKは成功して当たり前のように見える。しかし、これまでのワールドカップで蹴られたPKの総数204本であり、得点に至ったのは144本で成功率は70.5%である。見た目より決して高い得点率とは言えない。

PKの得点率を高くするための方法はサイドネットにインサイドで正確なシュートを蹴るとされている（少年サッカー練習方法ガイド、<http://www.ltlplus.net/> 2014年12月4日取得）、実際に選手がPKの動きや成功するためのコツをどのように捉え、どのような課題を持ってプレーや練習をしているのかについては、不明な点が多い。また、熟練度によってそれらに差があるのかは不明である。従って、それらが明らかになれば、PK得点率向上に役立つのではないかと考えた。

そこで本研究は、PKでの得点力の向上を図るために、サッカー競技歴のある人を対象に得点率向上に関する質問項目を作成し、アンケート調査を実施した。詳細は学会当日に発表を行う。

## P-B3

### サッカーにおけるドリブルスピードについて

○堀込拓哉(日本大学文理学部体育学科), 野口智博(日本大学文理学部)

キーワード: ドリブル動作, 50m ダッシュ, 各区間速度

サッカーにおけるドリブルとは, ボールを相手ゴールへ進めることやボールをキープ(保持)することを目的とし, スピードやクイックネスなどが求められる. ドリブラーは大きく別けてスピード型のドリブラーとテクニック型のドリブラーの2タイプの選手が存在すると考えられている. スピード型のドリブラーは, 瞬間的なダッシュ力もしくは継続的なスピードで, 守備の選手を置き去りにして前に進むことを得意とする. テクニック型のドリブラーは, 様々なフェイントを駆使し守備の選手をかわしボールを長時間キープ(保持)することを得意とする. 近年, 世界的に活躍するサッカー選手は, クリスティアーノ・ロナウドやリオネル・メッシなどを例にみるように, 前者型の選手が多く見られるようになった. これらのことから, ドリブル動作(With Ball Run)とドリブルのない疾走時のパフォーマンスを比較・検証することによって, 筆者自身のドリブル力の向上に役立てたり, また指導する立場になった時に, 指導の手掛かりにできるのではないかと考え, 本実験を行った. 方法は, A 高校サッカー部 22 名を被験者として, ボール操作なし (Non Ball Run) の 50m ダッシュと, WBR による 50m ダッシュを行い, それぞれの 5m, 10m, 20m, 50m 地点のタイムを計測し, 各区間の通過時間, 各区間速度を対応のある t 検定を用いて結果を比較した. 結果, NBR 条件の方が, WBR 条件より 50m 走速度は有意に高かった ( $p < 0.001$ ). NBR, WBR の関連性や考察などの詳細については, 当日報告する.

## P-B4

### バスケットボールにおける ワンハンドシュートとツーハンドシュートに関する意識調査

○小松葉菜(日本大学文理学部体育学科), 野口智博(日本大学文理学部)

キーワード: ワンハンドシュート, ツーハンドシュート

バスケットボールのシュートにはワンハンドシュート (OHS) とツーハンドシュート (THS) の2種類がある. バスケットボール経験者の中で, 男性は OHS を打つことがほとんどであるが, 女性はそうではない. プロ選手の中でも, ワンハンドで打つ選手もいればツーハンドで打つ選手もいる. 筆者自身, はじめはツーハンドのみでしかシュートを打たなかったが, 途中で当時の監督の指導により, 3P (スリーポイント) 時では THS, それ以外は OHS で打つようになった. しかしながら, OHS とツーハンドシュートのそれぞれのメリット・デメリットについて明らかにしている資料は少ない.

そこで本研究では, OHS と THS のそれぞれのメリット・デメリットをどのように考えているのか. また, どの程度それらの特徴を理解しているかどうかを, アンケート調査により調査した. 同時に, バスケットボール経験者が今の自身のシュートフォームに至るまでのきっかけを探り, 何がシュートフォームを形成する要因となっているかについて調べた.

方法は, バスケットボール経験者を対象とした. アンケートの質問内容は, 競技歴, 競技レベル, 普段のシュートの打ち方, その打ち方に至った要因, OHS・THS のメリット・デメリットの理解度などを質問項目とした. 詳細は当日報告する.

## P-B5

### バントによる得点率について

○金子紀新（日本大学文理学部），野口智博（日本大学文理学部）

キーワード：バント，得点率

バントとは，野球において，打者がアウトになる代わりに，走者を進塁させることを目的としたバントのひとつである（公認野球規則 10. 08）．しかし，1 イニングに 3 つしかないアウトのうち 1 つを献上するほどの効果がどの程度あるのかが定かではない．バントは，一般論としては有用されているにも関わらず，効果的な作戦なのかを検証した資料は少ない．アメリカのメジャーリーグの 2014 年シーズンでは，バントは 1 試合平均 0. 55 回であった．日本のプロ野球では，2014 年シーズン 1 試合平均 1. 88 回となっていた．また，第 96 回全国高校野球選手権では一試合平均 3. 77 回となっていた．バントの有用性に関する認識はアメリカよりも高いように思える．

そこで本調査では，バントが効果的な作戦かどうか，また，競技レベルが高くなるほどバント利用率が減少しているのではないかという仮説を立て，それらを検証するために，指名打者制度が平等に適応される条件で開催されている日本生命野球セバ交流戦での，バントによる得点率について調査した．条件は「ノーアウト一塁」「ノーアウト二塁」「ノーアウト二塁」の各条件であった．それらの条件において，バントが実行された場面での得点率と，実行されなかった場合の得点率および，得点への効果を比較した．更に，プロとアマチュア間に差があるかどうかを比較する目的で，平成 26 年度全国高校野球選手権大会においても，上記と同様の条件で比較してみた．結果詳細は当日発表する．

## P-B6

### 軟式野球における主観的速度と客観的速度の違いについて

○菊池晃一（日本大学文理学部体育学科），野口智博（日本大学文理学部）

キーワード：軟式球，主観的速度，客観的速度，打者

高校時代硬式野球を行っていたものの，大学体育会レベルで行わなくなった選手のほとんどが，硬式球から軟式球に転向している．近年軟式野球のサークルには，高校時代甲子園出場経験のある選手や，関東上位レベルの選手が数多くのプレーをしていて，軟式野球界の特に投手のレベルが高くなっている．そのため，打者のレベルもそれに応じて高くならざるを得ない．しかし，硬式球と軟式球の間には，ボールの物理的な違い（形状，重さ）があり，球速の違いや，変化球の曲がり具合の違い，ボールの「伸び」や「キレ」の違いがある．打者はいかにその違いに早く慣れるかが，大学サークルの選手たちの課題となる．そこで本調査では，軟式球ではなぜ投手の球速が速く感じるのか，そしてそのスピードボールに対してどのような対策をしているのかを明らかにしたいと考えた．

被験者は，軟式野球の競技経験 3 年（±1. 00）の本学野球サークルに所属する選手 7 名とした．実際にスピードガンを用いて実戦と同じ打者—投手間距離で打者を打席に立たせ，打者の主観的速度と，実際の速度の違いを比較した．投手のスピードは任意とし，一人の打者に対し，ランダムに 10 球の投球を行わせた．時速は 134 キロ～100 キロの間であった．その結果，実際の速度と誤差がある者と，僅かな差で球速を判断できる者が混在したことが明らかになった．次にその要因を探るため，軟式経験者約 150 名を調査対象としアンケート調査を行った．結果，詳細は当日報告する．

## P-B7

### 野球における睡眠とパフォーマンスとの関係性

○林達也(日本大学文理学部体育学科), 野口智博(日本大学文理学部)

キーワード: 睡眠, 野球

睡眠は人間が生きていく上で必要不可欠であり, 睡眠をとることでストレスを取り除く。また, 脳は身体より 10 倍もエネルギーを使っており, 脳の睡眠は身体の睡眠の 5 倍も必要だと言われている。現に体調管理において重要なこととして, 「しっかりと眠る」と挙げたアスリートは全体の 84. 5%に上り, 最も回答が多かった。また, アスリートは平均 8 時間 4 分の睡眠時間をとっていることもわかった(内田, 2012)。アスリートは意識的に睡眠をとることで, パフォーマンスに何らかの好影響があるものと解釈している可能性がある。このような通説がある中, 筆者自身が続けてきた野球に置き換えると, 睡眠がどのような形で練習や試合中の身体や精神に影響を与えるのか。また, 競技力やポジションによって, 睡眠環境への意識や睡眠のルーティーンなどの, 共通点や違いが表れるのか, ということに関心を持った。そこで本調査は, 野球歴を持つ大学生男子 110 名を対象に, 野球における睡眠とパフォーマンスとの関係性についてのアンケート調査を実施した(有効回答数 102)。アンケートでは野球歴やポジション, 戦歴を始め, 普段の睡眠状態, 試合前日の睡眠状態, 睡眠時間が不足しているときの対処法, 就寝環境, 食事状態等を質問項目として設定した。そして, 全体の集計結果から野球歴, ポジション, 戦歴の 3 点を軸として, 全体の集計結果との比較を行い, 違いや共通点等を考察した。結果については当日発表する。

## P-B8

### 野球の打者におけるルーティンの捉え方について

○川部太佑(日本大学文理学部体育学科), 野口智博(日本大学文理学部)

キーワード: 野球, ルーティン, 緊張

緊張とは「行動への準備状態への性質で, この準備状態には〈緊張〉があると称せられる」(奥村, 2010)。野球の試合では, プレッシャーのかかる場面において, 打席で普段の実力を発揮できなくなってしまう選手もいる。野球は一人の打者が 1 試合 9 イニングとして 4 から 5 回しか打席に立てず, 攻撃チャンスが限られており, 打者一人一人にかかるプレッシャーは大きい。練習では変わらない打撃技術を持つ者同士でも, 打席内で普段どおりの振る舞いをして好成績を残す選手もいれば, 緊張で身体を上手く動かせずに普段の実力を発揮できなくなってしまう選手もいる。そこで筆者は, 打者が打席前に行うルーティンについて, 実際に打者がどのような意識を持って打席に入るまでの準備を行っているかに着目し, 野球歴を持つ大学生 105 名を対象に, 野球におけるルーティンの捉え方についてのアンケート調査を実施した。アンケートは, 打席に入る前のルーティンの有無, ルーティンを行う選手はなぜルーティンを行うのか。また, ルーティンを意識することでどのような効果が期待できると思うか, ルーティンを行わない選手はなぜルーティンを行わないのか, どのようなルーティンをとるか等を質問項目として設定した。アンケート結果をもとに, ルーティンの捉え方の違いを競技レベル別に考察した。結果については当日発表する。

## P-B9

### プロ野球各球団ファンのファン心理 応援行動および集団所属意識の違いについて

○石黒達也（日本大学文理学部体育学科），野口智博（日本大学文理学部）

キーワード：プロ野球ファン 応援行動

近年プロ野球は人気低迷していると言われている。それを示すものとして2014年7月に行われたオールスターゲーム第1戦では、テレビの平均視聴率が9.7%となっており、1戦目で一桁の平均視聴率は史上初のことであった。このようなプロ野球の人気低迷の深刻化を受け、筆者は、プロ野球の各球団ファンがどのようなところに惹かれてファンになったのかを明らかにし、現在各球団が行っている地域活動やイベントと比較しつつ、新規ファン獲得のための具体的な方略を提案していきたいと考えた。またファン歴の違いによってファン心理、応援行動および集団所属意識が変化するのかを明らかにし、プロ野球にどのような魅力があるのかを探りたいと考えた。調査方法はアンケート調査とし、日本国内在住のプロ野球ファンを対象に、ファン心理、応援行動および集団所属意識に関して「好きな球団のにわかファンに反発を感じるか？」などに回答する形式の質問を合計20問用意した。そしてそれを応援する球団、ファン歴、年齢等を基準として、ファン意識に関する回答にどのような違いがあるかを分析した。結果、回答者の平均年齢は25.8歳、男子77.7%、女子22.3%で、ファン歴は男子で12.4年、女子では9.6年で、ファン歴に男女間の有意差はあった。好きな球団は、巨人33.7%、西武10.6%、ロッテ10.6%、広島8.7%、ヤクルト6.7%、阪神5.8%、ソフトバンク5.8%、DeNA5.8%、中日4.8%、日本ハム2.9%、楽天1.9%、オリックス1.9%であった。それらとファン意識の関連性についての詳細等は、当日発表する。

## P-B10

### サークルレベルでのバレーボール競技者の障害と競技復帰

○大野準司（日本大学文理学部体育学科），野口智博（日本大学文理学部）

キーワード：バレーボール、障害、環境的要因

バレーボールの障害の種類としては、ジャンパー膝や腰痛、捻挫や突き指等様々ある。相田ほか（2007）は、バレーボールにおける慢性障害・急性外傷の発生件数を比較した結果、慢性障害の件数の方が多く出ている。この研究は、競技レベルの高い選手が調査対象となっており、競技レベルのそれほど高くない愛好者を対象とした調査は少ない。しかし、筆者らが所属するサークルは、比較的競技志向の高い部員が多いため、障害に見舞われる者も比較的多い。従ってサークル部員の競技レベルで起こり得る傷害を事前に把握し、安全にサークル活動を楽しむための調査が必要であると考えた。

そこで本研究では、バレーボール競技者の中でも、大学サークルに所属してバレーボールを行っている男子大学生（42名、年齢20±2.38歳）を対象に、障害と競技復帰に関するアンケート調査を実施した。アンケートではそれぞれの質問にそった回答を選択する形式で行った。本調査の結果、サークル部員では環境的要因からの離脱が多く見られた。また、競技復帰タイミングは完治よりも早く、痛みを感じたまま競技復帰するケースが多数見られた。その理由としては、「大会が近い」等で、時期によっては休養が必要な障害であっても競技から離れないというケースも見られた。どちらも人員不足や練習日の少なさ等が原因として考えられた。

## P-B11

### ウエイトリフティング競技者における障害の系統性について

○戸松大（日本大学文理学部体育学科） 野口智博（日本大学文理学部）

キーワード：ウエイトリフティング，アンケート調査，関節弛緩性テスト

今日，ウエイトリフティング競技における障害の原因は，関節の柔軟性の不足や改善が必要とされる拳上動作が原因とされることが多い。しかしながら筆者は，ウエイトリフティングの競技経験を持つ者として，ウエイトリフティングの主要種目の動作特性から，経験的には障害に至る経緯はかなり複雑なものがあるのではないかと感じた。もしそこに何らかの系統性があるのならば，どのような系統性があるのかを調査することが，ウエイトリフティング選手が抱える障害に対する，根本的な問題解決に繋がると考えた。そこで，ウエイトリフティング競技者にアンケートおよび関節弛緩テストを行い，その比較から原因の系統性の有無や障害発症に至る経緯を調べた。

被験者はN大学重量挙げ部男子30名で，いずれも全国大会出場レベルの選手を対象とした。被験者には身長，体重などのプロフィールと，現在と過去の障害歴，ウエイトリフティング競技を開始してからの体重の増減，自分が考えるウエイトリフティング競技において「重要だと考える練習メニュー」「自分が練習メニューで重点を置いて取り組んでいること」や「好きな練習メニュー」「苦手な練習メニュー」「補助器具の有無」など，ウエイトリフティング競技に関する質問をアンケートに回答させた。また，被験者には中嶋（1985）の開発した全身関節弛緩性テスト（東大式）を実施させた。今回実施したアンケート結果と関節弛緩テストとの関係等については，当日発表する。

## P-B12

### 肩関節脱臼の治療，再脱臼の予防

○中川怜（日本大学文理学部体育学科），野口智博（日本大学文理学部）

キーワード：肩関節，脱臼，インタビュー調査

一般的に肩関節は大きな上腕骨頭を小さな関節窩が支える構造となっており，軟部組織や関節内陰圧により安定性を得ているため，最も脱臼が起りやすい関節であると言われている。また，一度脱臼すると再脱臼する確率が高いとも言われている。特に若年スポーツ選手は消炎鎮痛剤を服用し，非愛護的訓練をしがちであることから，一度受傷した人は習慣的に肩関節脱臼を繰り返しがちであると思われる。しかしながらこういった故障はパフォーマンスの低下を招きだけでなく，選手生命を短くすることも考えられるため，選手の主観や感覚情報から，故障に至るプロセスを把握し，故障を未然に防ぐ方略を実施することや，万一故障した場合にどのような処置を行うと良いか？などの情報が必要である。

そこで本調査では，肩関節脱臼の治療としては，どのような方法を用いることが効果的であるか，再脱臼を防ぐ方法があるか，そのような情報を実勢に受傷経験のある選手がどの程度自覚しているかを明らかにしたいと考えた。

方法は，肩関節脱臼経験者に対するインタビュー調査を行った。インタビューでは身長・体重等の身体的特性，肩関節脱臼の受傷状況，症状，医者処方（固定期間やその他の治療法，痛み止めの処方について），リハビリの方法，再脱臼の有無，頻度・回数，後遺症の有無（どのようなものであったか），競技復帰への具体的方法などを質問項目とした。結果詳細は当日報告する。

## P-B13

### 喫煙とスポーツの関係性

○仁科俊一（日本大学文理学部体育学科），野口智博（日本大学文理学部）

キーワード：喫煙，スポーツ

スポーツを行う上で喫煙することは，身体に害を与え，悪いものと認識されている．日本たばこ産業(JT)が毎年行っている全国たばこ喫煙者率調査では，2014年の喫煙者率が，1965年の調査開始以来初めて20%を下回り，19.7%となった．男女別では，男性が30.3%，女性が9.8%で，ともに前年より減少した．喫煙率の減少の要因は，例えば健康教育の質の向上やテレビ広告などによる，国民の健康に対する意識の高まりや，消費税率の引き上げに伴うたばこの価格上昇にあるとされている（日本たばこ産業WEBページ，2014年12月4日取得）．

スポーツの専門家の間では，喫煙が筋力，瞬発力，傷の回復力などを低下させると考えられている．しかし，喫煙による悪影響があり，喫煙者率の減少があるという背景の中，いまだに喫煙をするプロスポーツ選手が存在するという事実である．

そこで本調査では，スポーツを行う上で喫煙することに，何らかのメリットもあるのではないかという仮説を立て，日本大学文理学部に所属する学生（男子108名，女子44名，計152名）を対象に，喫煙とスポーツの関係性について，どのような意識を持っているかを調べるためのアンケート調査を行った．その結果，喫煙習慣を持つ者は全体の20.63%であった．そのほか詳細は学会当日に発表を行う．

## P-C1

### 視覚・聴覚刺激を伴った呼吸法の心理生理的な反応

○深見将志（日本体育大学大学院）

キーワード：TDMS，ローレンツプロット，呼吸運動

本研究では，大学生スポーツ選手の心理的課題とされる試合時の過緊張の緩和に実用性のある技法とされる呼吸法の効果について，試合場面に近似した視覚・聴覚刺激を付加した呼吸法と従来の呼吸法の比較検討を行った．実験参加者は，A 大学学友会アーチェリー部 25 名とし，これまでに継続的な呼吸法の指導を受けた経験がない者を対象とした．その結果，視覚・聴覚刺激の有無に関わらず，継続的な呼吸法トレーニングは副交感神経活動の亢進につながり，リラクゼーション状態をもたらした．視覚・聴覚刺激を付加する効果については，これら刺激により視覚情報や聴覚情報を利用して競技場面に近似した環境を具体的にイメージすることが容易となったことから，活性度と覚醒度が高まった．これは，試合場面の緊張感を享受した可能性を示すものであった．これらのことから，大学生スポーツ選手による視覚・聴覚刺激での呼吸法トレーニングは，活性度と覚醒度が高められ，さらに呼吸法によるリラックス効果は得られていると推測された．視覚・聴覚刺激により競技場面に近似した環境下で呼吸法トレーニングを実施することは，実験室内環境で実施する呼吸法トレーニングと同様の効果をもたらすことが認められた．視覚・聴覚刺激下での心理的スキル獲得は，競技場面での活用を考慮すると，従来のメンタルトレーニングによる心理的スキル獲得と同等かそれ以上の有効性を示したことが，本実験により確認された．

## P-C2

### 大学生スポーツ集団における上下関係ストレスモデルの構築

○義本大友（日本大学大学院教育学専攻），水落文夫（日本大学文理学部）

キーワード：大学スポーツ選手，対先輩ストレスサー，上下関係ストレスモデル

本研究は，大学スポーツ選手を対象にスポーツ集団内の上下関係において生起するストレスサーの中で，特に後輩に生起するストレスサーに着目し，「対先輩ストレスサー尺度」を作成することと，そのストレスサーに対する認知的評価，コーピング，ストレス反応の関連性を検討し，「上下関係ストレスモデル」を構築することを目的とした．まず，調査 1 では，上下関係において後輩として知覚するストレスサーを評価するための「対先輩ストレスサー尺度」の作成および「認知的評価尺度」と「対先輩ストレスコーピング尺度」の再構成を行った．調査 2 では，調査 1 で作成および再構成された尺度を用いて，Lazarus and Folkman (1984) のトランスアクションモデルを基盤としながら，「上下関係ストレスモデル」を構築した．分析には共分散構造分析を用いた．分析の結果以下の知見が得られた．①後輩が先輩に対して生起するストレスサーとして，「理不尽」，「地位的同調」，「懸念」の 3 因子が抽出された．②「ストレスサー→認知的評価→コーピング→ストレス反応」もしくは「ストレスサー→コーピング→ストレス反応」というストレス反応が生起するまでのプロセスを説明した「上下関係ストレスモデル」が構築された．③先輩に対して生起するストレスサーの多くは，後輩にとって脅威と認知されるものであり，その脅威認知が，「ネガティブ関係コーピング」や「解決先送りコーピング」を採択させることが示唆された．しかし，そのコーピングはストレス反応を減少させることはないことが明らかとなった．

## P-C3

### 体操競技選手に対するストレス刺激負荷と教示による意識調整が演技パフォーマンスに及ぼす影響

○小野耀介，高桑哲詩（日本大学文理学部体育学科），水落文夫（日本大学文理学部）

キーワード：心理ストレス刺激，後方宙返り，体操競技，

他のスポーツ競技と同様に，体操競技選手の演技パフォーマンスの精度は競技環境に潜むストレス刺激に影響される．例えば，場所の広さ，観衆の人数，普段使用する道具との異同などである．選手自身での体調管理と異なり，競技環境の変化においてはその場での迅速な調整が求められる．また，ゴルフのような運動が自動化されているスポーツでは，運動そのものに意識を集中させないことにより，成功率を上昇させている(田中，2014)．体操選手に対しては視線や着地範囲を強く意識させることで，逆に成功率が低下すると考えられる．そこで，体操競技選手の演技の精度に対する競技環境の変化に伴うストレス刺激の影響について検討した．今回のストレス刺激は課題の困難度に関係していると仮定される．被験者はN大学男子体操部8名の部員であった．被験者には着地範囲に制約のない条件と，着地範囲を挟めた条件で「直立姿勢からの後方宙返り着地の着地止め」を行わせた．また後者の条件において，視線あるいは着地範囲を強く意識させるための教示を与え，そのパフォーマンス評価を「止まる」，「手でバランスを取るが止まる」，「動く」の3つに分け，ストレス刺激と教示のパフォーマンスに対する影響を対応のある一要因分散分析により検定した．

## P-C4

### 大学スポーツ選手のスポーツ集団における対人関係による心理的ストレスについて

○阿部田早紀，笠本瞳，佐原まい（日本大学文理学部体育学科）  
水落文夫（日本大学文理学部）

キーワード：対人ストレッサー，スポーツ選手，心理的ストレス

スポーツ集団における選手の仲間や指導者との人間関係に関わる出来事は，選手の比較的多くのストレス反応を生起させるストレッサーである(洪倉，2001)．すなわち，スポーツ活動をするにあたり，人間関係によるストレスはそれらの活動に様々な影響を及ぼすことが考えられる．そこで，本研究はスポーツ選手がスポーツ集団の中で成立する対人関係ストレスに注目して，それらの要因となる心理・社会的ストレッサーを探った．本研究の方法として質的分析を採用した．大学生スポーツ選手が所属するスポーツ集団における代表的な対人関係は，選手－指導者，同期，先輩－後輩の3つの関係が挙げられる．そこで本研究では，A大学少林寺拳法部に所属している1～4年生を対象に，対人関係におけるストレスの要因を探るために，半構造化インタビューを3つの基幹的質問を中心に行った．以下が基幹的質問であった．

1. 指導者に対してどのようなストレスを感じるか．
2. 同期に対してどのようなストレスを感じるか．
3. 先輩，後輩に対してどのようなストレスを感じるか．

## P-C5

### バドミントンにおけるゲーム終盤時に抱く心理的ストレスと 競技レベルとの関係性

○金子泰志（日本大学文理学部体育学科），水落文夫（日本大学文理学部）

キーワード：バドミントン，ストレス，コーピング，ゲーム終盤

スポーツ選手は，技能レベルに依存することなく，スポーツ活動に伴う特有の心理的ストレスに常に脅かされており，これにうまく適応できないとパフォーマンスが低下することから，より高いパフォーマンスを発揮するために，スポーツ特有の心理的ストレスにいかにもうまく適応するかが課題であるといえる．これはバドミントンも例外ではないが，競技特性的にゲーム終盤時の競った展開の時に最も強く感じる．以上の時に感じる心理的ストレスを選手が良いストレス(Eustress)と捉えるか悪いストレス(Distress)と捉えるかで，動機づけが変化して，ゲーム終盤のパフォーマンスが左右すると考えられる．この認知の違いは，競技レベルに関係すると考えられる．すなわち競技レベルが高いほど，心理面のみならず体力面，技術面においてもゲーム終盤時の勝利への導き方の経験が豊富なため Eustress に捉えやすいと考えられる．また競技レベルに関係なく，選手自体にスポーツ特有のストレスに対してのコーピングスキルが備わっていれば，これもまた Eustress に捉えやすいと考えられる．

そこで本研究では，バドミントン部に所属している大学生を調査対象に，プロフィール(競技歴，出場経験など)とコーピングスキル尺度を測定する質問紙調査を行う．本研究では，競技レベルが高いほど Eustress に捉えやすいという仮説を立証するため，上級者と中級者のみ対象とする．上中級の基準は関東学生バドミントン連盟のランク基準に則るものとする．

## P-C6

### イメージリハーサルがトライアスロンのレースに及ぼす影響

○福永晃樹裕（日本大学文理学部体育学科），水落文夫（日本大学文理学部）

キーワード：トライアスロン，イメージリハーサル，戦術，ストレス反応

トライアスロンにおいて，戦術を立てることは順位の変動に大きく関わる要因の一つである．天候，潮の流れ，風向き，他選手などの外的要因に左右されるからである．

本研究では，トライアスロン競技前のイメージリハーサルが，試合前のストレス反応尺度，コンディション尺度，各種目の実力発揮度によどのような影響を及ぼすのか明らかにすることを目的とした．被験者は大学生トライアスリートで，イメージリハーサルなしとイメージリハーサルありの試合を各1試合ずつ設けて質問紙（プロフィール，DIPS-B.1，高校運動部員用ストレス反応尺度，実力発揮度で構成）の調査を行った．試合前日にプロフィール，イメージリハーサル用紙を，当日朝に DIPS-B.1，高校運動部員用ストレス反応尺度を，レース終了後に実力発揮度の自己評価を記入させた．

イメージリハーサルありとイメージリハーサルなしの間で独立した t 検定を行った結果，ストレス反応尺度の抗うつ不安項目，コンディション尺度の集中項目，バイクパートでの実力発揮度に有意な差が認められた．イメージリハーサル「あり」の方が「なし」より抗うつ不安，集中，バイクパートでの実力発揮度の値が低下していた．このことから，戦術的な側面をターゲットとするイメージリハーサルを行うことは，抗うつ不安を抑制することが明らかとなった．

## P-C7

### 個人種目選手の外的・内的イメージの想起が スポーツ技術獲得に及ぼす影響

○都築昂也, 久保潤一郎 (日本大学文理学部体育学科), 水落文夫 (日本大学文理学部)

キーワード: イメージ想起, 外的イメージ, 内的イメージ, 個人種目

外的イメージを頭の中で思い描くことは, 自分のフォームや戦略を確認する役割を担っている. 一方で内的イメージは動作のタイミングや距離知覚を確認することに適している. したがって, スポーツの練習におけるイメージトレーニングで外的イメージを使うことが, スポーツで用いられる様々な技術の獲得や理解に効果があるとされている. しかし, この2つのイメージの使用頻度の違いが, どのような技術の獲得や理解と関係するのかを検証した研究は見られない. そこで, 本研究では個人種目を経験したことのある大学生を対象に動作フォームや戦術などにみられるスポーツ技術の獲得や理解あるいは, 技能向上のためにイメージをどのように使っていたのかを調査した. そして, これらのイメージを外的イメージと内的イメージに分類して, 両者の時間, 頻度, 場面, 内容について分析した. これらのデータを競技レベルで比較した. そして内的イメージに対して, 外的イメージの使用頻度が高いことで競技レベルが高くなるのかについて検証した.

## P-C8

### 男子体操選手の熟達志向性による目標設定が パフォーマンスに及ぼす影響

○小林亮介 (日本大学文理学部体育学科), 水落文夫 (日本大学文理学部)

キーワード: 目標設定, 熟達志向性, 動機づけ, 自己フィードバック

スポーツ競技選手の多くは目標を持って練習や試合に臨んでいる. しかし, その目標は漠然としたものであり, 具体的で明確な目標が設定されていない場合が多い. そのために心理的効果は期待されない. 伊藤(1996)は, 熟達志向性とは自己の内的な基準による技術の向上に, より大きな関心があることで, 他者に優ることに, より興味をもつ成績志向性よりもスポーツ競技に対する動機づけの向上と維持に有効かつ重要であるとしている. そこで本研究では, 熟達志向性による具体的な目標設定がスポーツ競技におけるパフォーマンスに及ぼす変化と動機づけの持続性にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることを目的とした.

測定対象は, 体操部所属の男子大学生 10 名で, このうち 5 名に対して, 自己記録用紙を用いた目標設定と自己フィードバックの方略による介入を行った. 他の 5 名はコントロールとした. そして定期的に行われる採点会と試合の演技パフォーマンスの変化を検討した. 目標設定の 5 名には 1 か月後の試合に向けての中期目標と 1 週間ごとの短期目標を具体的に言語化させるよう設定させ, 採点会や試合では, D スコアと E スコアを集計し比較した. さらに, すべての対象者に, 週 1 回ごとに, 競技意欲検査(SMI)を用い, 動機づけのレベルを評価した.

## P-C9

### **メンタルトレーニングによって 高校野球選手の心理状態はどのように変化していくのか**

○猿谷信人（日本大学文理学部体育学科）、水落文夫（日本大学文理学部）

キーワード：メンタルトレーニング，半構造化インタビュー，質的分析，高校野球

スポーツ選手にとって不安や緊張などは競技をする上で回避できないものである。練習ではミスが少なく本来の実力を発揮できるが、試合や重要な場面になると実力を発揮できないといった選手は少なくない。これまでもメンタルトレーニングの効果に関する研究は数多くされているが、質的な研究手法を用いたアプローチはあまりみられない。そのため、メンタルトレーニングによって高校野球選手の心理的スキルとそれに基づく心理状態がどのように変化していくのかを明らかにすることは、実力発揮のための大きなヒントになる可能性がある。

本研究では心理的競技能力診断検査（DIPCA. 3）によって心理的スキルが低いと判定された、いわゆるメンタルが弱いと思われる2名を対象に、2ヶ月間メンタルトレーニングを行った。メンタルトレーニングの内容は呼吸法、緊張する場面やピークパフォーマンスのイメージで構成され、メンタルトレーニングの進行状況によって、試合での作戦などを織り交ぜながら実施した。そして、どのように変化していくのかを半構造化インタビューを用いながら、質的研究によって選手の心理状態の変化を追跡した。半構造化インタビューはメンタルトレーニング開始前、実施中2回、終了後の計4回行うことで変化のプロセスを調査した。

## P-C10

### **運動部活動が社会的スキルに及ぼす影響**

○伊与久剛、荒川文哉、田口和磨（日本大学文理学部体育学科）  
水落文夫（日本大学文理学部）

キーワード：コミュニケーション能力，思春期，運動部活動

身体的機能だけでなく様々な心理的機能が発達する少年期から青年期にかけての思春期において、運動部活動の経験は社会的スキルの中でもコミュニケーション能力の発達に関係すると考えられる。それは、運動部に活動参加していた者は、行っていなかった者に比べて濃密な人間関係を築ける機会が増えるからであろう。さらに、顧問やコーチなど大人との関わりも増えることもコミュニケーション能力向上につながることも考えられる。

本研究は大学生（A大学，男女）を対象とし、中学校・高校時代に運動部活動を行っていた者と行っていなかった者では、現在の社会的スキル（コミュニケーション能力など）に違いはあるのかについて質問紙調査（菊池・kiss-18対人関係の社会的スキル）を行った。もちろん、コミュニケーション能力の差が生まれるには、他にもいくつかの要因が関係している可能性がある。特に、男女によって思春期のタイミングが異なるため、これに注目して運動部活動の有無を男女別に集計した。なお、運動部活動の参加は中学，高校含め3年以上経験した者を対象とした。

## P-C11

### ソフトボールチームのチームビルディングを用いたトレーニングによる チームメンバーのコミュニケーションスキル向上効果

○麻田健太郎（日本大学文理学部体育学科）、水落文夫（日本大学文理学部）

キーワード：チームビルディング，コミュニケーションスキル，チーム機能

スポーツにおいて最高のパフォーマンスを発揮するためには、身体的なトレーニングだけでなく心理的なトレーニングも重要である。そして、チームスポーツにおいてチームが上手く機能するためには、技術や戦術と同じように、コミュニケーションも重要な要素の一つである。そこで、行動科学の知識や技法を用いてチームの組織力を高め、外部環境への適応力を増すことをねらいとしたチームビルディングが用いられ、コミュニケーションスキルを向上させるために多方面で導入されている。先行研究では、戦術面において計画されたチームビルディングや、練習とは別にエクササイズを使いコミュニケーション能力を上げるといった研究、大学の野球部において2日間チームビルディングを行い、チーム活性度を短期的に高めたという研究がある。これらの研究をふまえ、本研究ではチーム内の選手のコミュニケーションスキル向上を目的とした2週間のチームビルディングによる介入を行った。介入内容は、個人・チームの目標設定、チーム全員で成功するまで行う練習、毎回ペア練習ではペアを変える、練習別の声・ハイタッチ・コミュニケーションをとることへの促しであった。そして実施回数を記録し、自己評価表への記入させた。そして、トレーニング前後で選手の心理的競技能力、コミュニケーションスキル、チーム有能感、対メンバー感の変化をとらえることで、コミュニケーション能力およびチーム機能向上の効果を検討した。

## P-C12

### ブレイクダンスにおけるウィンドミル習得の必須事項について

○清水陽平（日本大学文理学部体育学科）、野口智博（日本大学文理学部）

キーワード：ブレイクダンス，ウィンドミル

ウィンドミルは、ブレイクダンスの中で最も有名な技とされ、ブレイクダンスを始める際の登竜門的存在である。株式会社LDC調べ（2014年12月4日取得）によると現在ストリートダンス競技人口は200万人であるが、ダンス必修化の影響によって1400万人にまで人口が達するといわれている。ダンス人口が増加した際、さらにそこからブレイクダンスを始める場合、恐らく最初に来る壁となるだろうウィンドミルを習得するための、一助になる資料は見当たらない。そのため、本研究では、ウィンドミルを習得する際にダンサー自身が何を意識し、どのような練習を積むと、より効率的に、より短時間でウィンドミルを習得できるかを明らかにすることを目的とした。被験者は、ダンスサークルに所属し、週2回以上練習を行っている学生11名を対象とした。それらをウィンドミル習得者（8名）と初心者（3名）に分け、被験者のウィンドミル動作を携帯型端末器iPhone6を用いて撮影し、スローモーション再生機能を用いて240fpsで再生し、それらを被験者に観察させ比較させた。そして、全体の動作を5つの局面に分類し、各局面の動作感覚について当該被験者にアンケート及び聞き取り調査を行い、ウィンドミル習得者と未修得者の違いを抽出した。それらの比較から、ウィンドミル習得のための必須項目を抽出した。結果、ダンサー自身の意識と実際の動きの両面から、ウィンドミル習得成功につながるアプローチが可能であると考えた。結果、考察は後日に発表する。

## P-C13

### スポーツ活動時に聴く音楽の趣向性に関する調査 —本学体育学科学生を対象として—

○伊藤希（日本大学文理学部体育学科）、野口智博（日本大学文理学部）

キーワード：スポーツ，音楽

昨今の健康志向ブームにより，スポーツをライフスタイルに取り入れる人たちが増えている．東京マラソンの応募倍率を見ると 2007 年の第 1 回大会では 3.1 倍，第 2 回大会では 5.2 倍，第 3 回大会では 7.5 倍，2015 年に行われる予定の第 8 回大会では 10.3 倍と回数を重ねるごとに応募者が増えていることなどからもその傾向が読み取れる．また「皇居ランナー」「美ジョガー」などといった人たちも現れてきたことから，ランニングを始める人が増えたことが伺える．それに伴い，SONY 社は 2013 年に泳ぎながらも音楽を楽しめる高い防水機能のついた「ヘッドフォン一体型ウォークマン」が発売された．また，ランニング中にも簡単に操作ができるように指にはめて使う「リングタイプリモコン」も開発された．Apple はスポーツ用品メーカーの NIKE と提携を結び，ランニングシューズと iPhone や iPod touch のアプリとを連動して，音楽を聴きながらランニングのアドバイスや走った距離，時間，消費カロリーなどを計測できるものを発売し，売り上げを伸ばしている．これらのことから，近年は音楽と運動がより密接に関連していると言っても過言ではない．そこで本調査では，継続的，定期的にスポーツを行っている学生にアンケート調査を行い，スポーツ活動時にどのような音楽を聴いているのか，またそれをどのような効果があると自覚しているかを多角的に調べた．結果詳細は当日報告する．

## P-D1

### ソフトテニス競技における自信とその資源との関係 ー競技歴および競技経験年数に着目してー

○佐久間智央（九州工業大学大学院），磯貝浩久（九州工業大学）

キーワード：ソフトテニス，スポーツコンフィデンス，多母集団同時分析

Vealey (1986) は，スポーツ固有の自信として，スポーツコンフィデンス (sport-confidence) の概念を提言し，スポーツにおける自信の資源についての尺度を開発した (Vealey et al.,1998)．プレーヤーに対する自信の資源の重要性についても検討されているものの，日本での研究は進んでいない．そこで本研究では，日本語版自信の資源尺度 (J-SSCQ)，ソフトテニス版スポーツコンフィデンス尺度 (ST-SCI) を用いて，競技歴別および競技経験年数別における自信とその資源との関係を明らかにすることを目的とした．対象者は，高校生 (124名)・大学生 (63名) 計 187名のソフトテニス選手であった．平均年齢  $17.2 \pm 2.0$  歳，平均競技経験年数  $5.4 \pm 2.8$  年であった．調査期間は 2014 年 6 月から 2014 年 8 月であった．調査内容は，①フェイスシート，②ST-SCI，③ J-SSCQ の 3 つについて調査した．ST-SCI は，5 因子 15 項目で構成されて尺度である．J-SSCQ は，4 因子 14 項目で構成されて尺度である．

競技歴および競技経験年数別における自信とその資源との関係性を検討するための分析は，多母集団同時分析を行った．本研究の結果の詳細は，学会当日に報告する．

## P-D2

### 野球選手の競技年数と特性的自己効力感の関係

○岩下博樹（日本大学文理学部体育学科），水落文夫（日本大学文理学部）

キーワード：自己効力感，野球，競技年数，特性的自己効力感

自信とは一般的に自分の能力や価値を確信することであり，また自分の正しさを信じて疑わないことである．これはスポーツ競技選手でも必要なことであり，欧米における研究では主に自己効力感とスポーツコンフィデンスの 2 つの理論に基づいて検討されている．Bandura(1997)は，ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるかという確信，すなわち自己の行動を統制し，必要な行動を効果的に遂行できるという可能性の認知および信念のことを自己効力感と定義した．その自己効力感には 2 水準があり，課題特異的自己効力感と特性的自己効力感である．

安田ほか (2009) は，中学時・高校時・大学時で運動部に所属していた大学生が，中学時のみに運動部に所属していた大学生よりも特性的自己効力感の得点が有意に高かったと報告した．功力 (1991) は野球のゲームにおける投手の役割は大きく，勝敗のカギの 70% は投手力にあると述べている．また徳永ほか (2005) の研究では，野球のポジション別にみると投手と捕手が他のポジションよりも心理的競技能力の自信が優れていることを示している．野球は 9 つの守備位置があり，それぞれの守備位置で守備範囲や動作が異なる競技である．そこで，本研究では，特性的自己効力感が高い選手は競技年数が長く，ポジション別に違いがあるという仮説を設定し，Sherer et al.(1982)の特性的自己効力感を評価する質問紙を使用し，仮説について検証する．

## P-D3

### 体操競技選手の失敗予防の対処に対する 自信と競技力の関係について

○島田恭平（日本大学文理学部体育学科）、水落文夫（日本大学文理学部）

キーワード：自信、体操競技、イメージトレーニング、失敗対処

中島ら（1997）や徳永（2005）は、スポーツ選手にとって、精神力は技術、体力と共に競技力を左右する重要な要因であるとしている。そのため、スポーツ選手の精神力についても多くの研究がなされてきている。体操競技では男子6種目、女子4種目の全く異なった器械器具での演技を実施しなければならず、さらに大会によっては団体戦、個人戦、種目別戦の3つの試合を戦わなければならない場合もある。したがって、体力、技術力のような体操競技の演技のできばえを左右する能力に対して、それらを支えるための精神力（心理的競技能力）が重要な役割を果たすと考えられる。立花ら（2001）の研究によると、体操競技の競技レベルが高い選手ほど競技意欲、自信、作戦能力が有意に高いことを認めている。このことから、心理的競技能力の中でも自信が体操競技における競技力を支える割合は大きいと考えられる。体操競技は失敗をしないことが重要であり、そのための対処をしていく必要がある。本研究では、体操競技選手の失敗対処に対する自信に着目し、競技レベルが高い選手ほど失敗に対する対処に対する自信が高いかどうかについて検討した。さらに、試合に向けてのイメージトレーニングによってその自信を高めることができるかどうか検討した。

## P-D4

### ラグビーレフリーにおけるレフリング実践知に関する質的分析

○日紫喜熙士（日本大学大学院教育学専攻）、水落文夫（日本大学文理学部）

キーワード：ラグビー、レフリング、質的分析、M-GTA

ラグビーレフリーに対しては、生理学的な研究や運動量による比較研究が行われているが、レフリングに関わる実践知についての研究は、十分に蓄積されていない。ラグビーにおけるレフリングの特性は、他競技に比べ多様と考えられることから、レフリングの実践を通じて得られた実践知を構造化するが審判育成をする上で重要となる。そこで本研究では、ラグビーレフリーのレフリングに関して日本のB級以上のレフリーを対象に半構造化インタビューを行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いて、「選手がベストパフォーマンスを発揮するためにレフリーがなすべき実践知に基づく行動」について分析を行った。

M-GTAによる分析の結果、次のような仮説的知見を導き出した。ラグビーレフリーには①社会性などのパーソナリティと②レフリングの知識などの要件が備わっている必要がある。さらに、③レフリー間の信頼関係と④対戦チームのスカウティングが試合中のレフリングに大きな影響を与える。レフリングは⑤「ゲーム・マネジメント」、⑥「インプレッション・マネジメント」、⑦「マン・マネジメント」の3つに支えられており、これらの相互作用によって、ゲームにおいて選手にベストパフォーマンスを発揮させるレフリングが可能となる。そして、レフリーの行動は試合中での活動にとどまらず、⑧試合の反省と⑨選手・指導者とのコミュニケーションを図る事で⑩改善点を明確化し、技能向上を図ろうとしている。これらの構造化されたプロセスを概念図によって可視化した。

## P-D5

### イップスと書癡の関連性

○市川あやめ，向後波香（日本大学文理学部体育学科），水落文夫（日本大学文理学部）

キーワード：イップス，書癡，ストレス関連疾患，文献調査

イップスは精神的な原因などによりスポーツの動作に支障をきたし，自分の思い通りのプレーができなくなる運動障害のことである（福永，1993）．ゴルフのパッティングや野球のスローイングで発生することが知られており，その改善の困難性も高い．このイップスがストレス関連疾患と深く関わっているならば，イップスにもストレス関連疾患と同じ治療方法で効果があると予測される．その場合，イップスの症状を効果的に改善させることができると考えられる．

ストレス関連疾患に「書癡」がある．これは，字を書こうとするととき，または字を書いている最中に手が震え（振戦），または痛み（疼痛）が発生し，字を書くことが困難となる書字障害（ストレス科学辞典）である．そしてこの書癡と，ゴルフのショットやパッティングにおけるイップスの症状の関係性を発症原因，症状，思考，感情の4つの側面から調査した．調査対象は，書癡とイップスおよび関連キーワードでヒットした学術文献であった．そして，メタ分析的にそれぞれの側面における両者の共通点と相違点を整理した．

## P-D6

### “附締太鼓”におけるテンポの変化による感情変化についての研究

○平野尚輝（日本大学大学院教育学専攻），水落文夫（日本大学文理学部）

キーワード：和太鼓，テンポ，感情，心拍変動，心理検査

和太鼓は，主に文化的なものとして見られることが多いが，「音のスポーツ」と表現されるように，他の楽器にはない運動性を要求される．様々なテンポで太鼓を打つ上肢の筋活動や上半身の動きを支えるため，相撲のしこを踏むように構えられ，リズムに合わせて微妙に動く下肢の筋活動は他のメジャースポーツにも劣らないほどハードな運動負荷が要求される．また，和太鼓は音階を持たない楽器のため，演奏においてその芸術性を決定する要素としてリズム及びテンポの占める割合が非常に多い(山口・藤原，2012)．

これまでの和太鼓研究におけるデータは，打動作におけるバイオメカニクスや音楽療法に関するデータが多い．しかし，これまでにテンポの変化によって和太鼓演奏者の感情にどのような変化が表れるのかについての研究データは十分に蓄積されていない．和太鼓は打動作によって音が生まれ，その運動刺激と音刺激が打つ者の感情に働きかけると思われる．

本研究の目的は，“附締太鼓”におけるリズムのテンポを変えることによって，演奏中や演奏後の感情にどのような変化が表れるのかについて，心拍変動(ローレンツプロット法)と心理検査(二次元気分尺度)を用いて検討した．実験参加者は，東京都日本太鼓連盟加盟団体の2チームに所属する9名であった．

## P-D7

### **サッカーの競技中の1点における重みについて —競技者の心理状態に与える影響に着目して—**

○子安博史（日本大学文理学部体育学科）、水落文夫（日本大学文理学部）

キーワード：1得点，1失点，質的分析，M-GTA

サッカーに関する研究において，競技中の1得点や1失点が競技者の心理状態にどのように影響を及ぼしているかを分析している研究は少ない．本研究は1点が競技者の心理状態にどのような影響を与えるか，その心理的様相の変化を質的分析するため，競技歴4年以上の競技者を対象に半構造化インタビューを行い，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いて1得点1失点が競技者に与える影響の要因を抽出した．そして相手チームの競技レベルと失点や得点の時間帯を組み合わせ，どのような状況下の得点や失点が競技者の心理状態に影響を与えるのか，それらの構造とプロセスを明らかにすることを目的とした．

M-GTAによる分析の結果，次のような仮説的知見を導き出した．競技者は競技前，競技中に競技的特性因子（①オフサイド，②手を使えるGKの存在，③攻守の連動，④脚で競技することの不安定さ，⑤消極的プレーによるペナルティーがない）によって得点が入りにくい競技，失点すると勝つことが難しい競技という認識を抱いていた．こうした認識は得点へのプレッシャー，失点への恐怖というストレスに変化する．つまり，競技者は得点や失点によって競技的特性というストレスに苛まされたり，解放されたりすることによって競技中の心理的様相が変化し，1点の重みというものが生起すると考えられる．これらの構造化されたプロセスを概念図によって可視化した．

## P-D8

### **実力発揮に関する練習型選手と本番型選手の パーソナリティの違い**

○長野礼和，山口武蔵（日本大学文理学部体育学科），水落文夫（日本大学文理学部）

キーワード：実力発揮，練習型，本番型，パーソナリティ

スポーツ選手には，練習のときに良いプレーをしているにも関わらず，本番のときには良いプレーができない選手と，練習のときには良いプレーができないにも関わらず，本番のときに良いプレーをできる選手がいる．これについて徳永ら(1991)は，状態不安が実力発揮に影響すると研究報告している．この状態不安のレベルは，パーソナリティの側面である特性不安に影響することが知られている．すなわち，試験など緊張状態における実力発揮には各人のパーソナリティが関係していると思われる．それならばスポーツにおける実力発揮においても，パーソナリティが関係していると考えられる．そこで本研究では練習型選手と本番型選手のパーソナリティにはどのような違いがあるのか検討した．大学のラグビーサークルに加入している選手を対象に，各選手が自己評価と他者評価によって練習型か本番型か分類する質問紙を実施した．その際各選手に主要5因子性格検査を行い，練習型選手と本番型選手のパーソナリティを比較した．

## P-D9

### 強度の異なる運動前後の気分変化について

○小島秀斗（日本大学文理学部体育学科）， 水落文夫（日本大学文理学部）

キーワード：気分,  $\beta$ エンドルフィン, 心理的ストレス

運動を行うことにより心理的ストレスが軽減される。山本ら（1986）は運動強度・持続時間と気分の関係について研究し、鎮痛作用を持つ $\beta$ エンドルフィンが低強度の40分間の運動と中程度16分間の運動直後に有意に増加することを報告した。強度が高いが断続的で短い条件では $\beta$ エンドルフィンは有意に増加しなかった。ただし高強度運動での $\beta$ エンドルフィンの変化や気分の変化についての研究は十分でない。低強度運動が心理的ストレスを軽減させるのは周知の事実であるが、高強度運動でも気分の良い影響を与えるかどうかは明確ではない。本研究では、低強度12分間（毎分100～120bpm）と高強度12分間（毎分160～180bpm）の運動をそれぞれ別の日に行い、運動前後でPOMS短縮版を使用し、気分（「緊張—不安」、「抑うつ—落ち込み」、「怒り—敵意」、「活気」、「疲労」、「混乱」）の変化を評価した。低強度運動の前後では、「緊張—不安」、「怒り—敵意」、「疲労」、「混乱」の項目が有意に減少した。高強度運動の前後では、「活気」、「混乱」の値が有意に変化した。そのとき「活気」が有意に上がり、「混乱」の値は有意に減少した。高強度運動と比べて低強度運動後では、「緊張—不安」、「怒り—敵意」の項目には有意な変化が見られなかったが、低強度運動では変化の見られなかった「活気」の項目が高強度運動では有意な変化が見られた。

## P-D10

### 陸上競技投擲種目における 最適パフォーマンス発揮に影響する心理状態

○若月優士，大沼匠，三島優祐（日本大学文理学部体育学科）

水落文夫（日本大学文理学部）

キーワード：陸上競技，投擲，最適パフォーマンス，心理状態

投擲種目は、投擲回数が数回あり、1回の投擲ごとに心理状態が変化すると考えられる。ベストな投擲をした後は気持ちに余裕ができ、次の投擲でも良い記録を出すことができる。逆に悪い投擲をした後は、次の投擲でもネガティブな気持ちと低い記録を引きずってしまうことが考えられる。優れた選手でも、最適な心理状態で試技に臨まないと良い結果を得ることができないであろう。そこで、投擲種目における選手の良い心理状態とはどんな状態か、またそのような心理状態は6回の投擲でどのようなプロセスで出現し、最適パフォーマンスはどこで発揮されるのかについて調査した。調査方法は半構造化インタビューを採用し、日本大学の陸上競技部の投擲選手4名(全国大会出場経験者)を対象にインタビューを行った。基幹的質問に「前半の投擲で良い記録がでたときはどのような心理状態なのか」「悪かったときはどのような心理状態なのか」、「前の試技の心理状態は次の試技の心理状態と記録にどのように影響するのか」の3つを置き、分析方法として修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を用いて、概念化、カテゴリ化、理論化の手順を踏んで分析を行った。

## **P-D11**

### **試合直前における指導者の言葉がけとその背景要因が スポーツ選手の動機づけに及ぼす影響**

○菅野慎太郎（日本大学大学院教育学専攻）、水落文夫（日本大学文理学部）

キーワード：動機づけ、指導者の言葉がけ、状況的質問票、構造方程式モデリング

質的研究手法を用いて、試合直前における指導者の言葉がけがスポーツ選手の動機づけに影響する要因を抽出し、それらの構造とプロセスを選手側の視点から探究した。その結果、スポーツ選手は指導者への尊敬、選手の特徴、当日の状況、言葉の吟味によって心的構えを形成し、これをポジティブあるいはネガティブな状態に変えることで、そのときの動機づけに影響を及ぼしていた。そして、心構えに偏重された言葉がけは、それらによって引き起こされた選手のポジティブおよびネガティブな感情の変化を介して、指導者の言葉がけは選手の動機づけに働きかけていくことが考えられた。

そこで本研究は、言葉がけの背景要因である「指導者への尊敬」「選手の性格」が、選手の「心的構え」を形成し、その「心的構え」に偏重された言葉がけが、認知的評価と感情を介して、動機づけに影響するという仮説モデルが設定されたため、これを構造方程式モデリングを用いて検証することを目的とした。本研究は、実際に試合直前場面を想定させるため、それを想像して回答してもらう状況的質問票形式を採用した。すなわち、想定した指導者に対する信頼感と指導者から言葉がけをされる時の心的構えを自己評価し、それから試合直前における指導者の言葉がけの2場面（ポジティブ×ネガティブ）を呈示し、それによって喚起される認知的評価、感情、動機づけを自己評価させた。さらに、最後に性格の側面を尋ねる質問紙調査を行った。

## **P-D12**

### **継続的運動の開始のきっかけと継続する理由の年代比較**

○森本亜珠沙、田代ふうか（日本大学文理学部体育学科）、水落文夫（日本大学文理学部）

キーワード：運動行動、きっかけ、継続、世代間比較

適度な継続的運動は、人々の心身の健康や生きがいなど様々な側面で良好な方向へ導く刺激となる。そこで、運動の恩恵が周知されてもなお座位中心のライフスタイルを守る多くの人々が運動に参加し、継続するために、その実現と阻害に働きかける要因を探ることにした。ただし、世代によって運動への参加・継続意欲を高めるアプローチが異なると考えられるため、世代間の運動の参加・継続理由の違いに注目した。いくつかの先行研究から、設定された仮説は、大学生に対して、高校生以下では家族・友人からの誘いによって開始し、社会人以上では健康を維持するために開始するというものである。

調査対象は、高校生以下、大学生、社会人以上（高齢者含む）に質問紙調査を行った。質問は継続している運動の開始のきっかけと継続理由についてであった。そして、回答データをもとに、大学生のデータを基準として他の2群との継続運動の開始および継続を支える心理的要因を比較した。3群とも運動の開始のきっかけと継続する理由には違いがみられた。

## **P-D13**

### **中学生の劣等感と目標志向性が体育授業の参加動機に及ぼす影響**

○高橋瑞穂，小谷野芽衣（日本大学文理学部体育学科），水落文夫（日本大学文理学部）

キーワード：劣等感，目標志向性，動機づけ，中学生，体育授業

体育の授業場面においては，運動能力の優劣が目に見えるので他人より劣っていると感じる「劣等感」が生じやすい環境である．授業中のできない経験による劣等感は運動嫌いや体育嫌いを生み，授業への積極的参加を実現する動機づけがされないことが考えられる．しかし，アドラー（Adler,1969）によれば，劣等感は誰にでもあり人間の努力と成功の基礎をなすものとされる．したがって，劣等感が強くても高い動機づけがみられる場合も推測できる．その場合，性格的な側面が影響していると考えられることから，その調整要因として，個人の行動の継続に影響する目標志向性に着目した．これまでの研究で，適切な課題目標を設定できる者は高い動機づけを示すこと（達成目標理論）は知られている．そこで本研究では，劣等感の強弱と目標志向性の関係における動機づけへの影響を検証した．方法として，K中学校の1～3学年男女を対象に質問紙調査を行った．用いた心理尺度は，中学生用の「YG性格検査」（劣等感項目）と西田（1988）の「体育における学習意欲調査（AMPET）」，細田・杉原（1999）の「目標志向性尺度」の3つであった．

---

## 大会組織

---

大会委員長	:	重城 哲	(日本大学理工学部)
大会事務局長	:	重城 哲	(日本大学理工学部)
大会事務	:	野口 智博	(日本大学文理学部)
		高橋 正則	(日本大学文理学部)
		水落 文夫	(日本大学文理学部)
		佐藤 紀子	(日本大学歯学部)
		鈴木 典	(日本大学松戸歯学部)
		橋口 泰一	(日本大学松戸歯学部)
		佐藤 佑介	(日本大学商学部)
		近藤 克之	(日本大学経済学部)
		菅野 慎太郎	(日本大学大学院)
		義本 大友	(日本大学大学院)
		日紫喜 熙士	(日本大学大学院)
		平野 尚輝	(日本大学大学院)
		赤堀 育恵	(日本大学文理学部体育学科)

### 桜門体育学会 平成26年度大会事務局

日本大学文理学部体育学科

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40

Tel : 03-5317-9717

Fax : 03-5317-9426

E-mail : [pe4900@gmail.com](mailto:pe4900@gmail.com)

桜門体育学会 URL : <http://www.nu-taiiku.jp/society>



**桜門体育学会事務局**  
〒275-8576 千葉県習志野市新栄2-11-1

**日本大学生産工学部**  
**教養・基礎科学系 岩館研究室**  
E-mail: [omonjim@nu-taiiku.jp](mailto:omonjim@nu-taiiku.jp)